

# 陸井三郎先生に聞く

1991年7月14日

於 東京大学アメリカ研究資料センター

センター長室

聞き手 河村 望・油井大三郎・上杉 忍

日本におけるアメリカ研究関係資料の収集は、東京大学アメリカ研究資料センターの活動の重要な一項目をなしている。ことに、戦前に日本人によって著わされたアメリカ関係書、またアメリカ研究書の邦訳書の収集は、本センターとして力をそそいできた事業の一つである。これとならんで、日本のアメリカ研究の先達に対するオーラル・ヒストリーの企画が日米友好基金からの援助によって、ここ数年来予算的に実現可能となり、徐々にではあるが実施され、これまでに26巻が刊行されるに至っている。運営委員会として、関係者一同のご尽力に感謝するとともに、財政的に許される限り、この活動を続けたいと願っている。

刊行にあたっては、インタビューのテープ資料をおこし、御本人に原稿に目を通して加筆訂正を行なって頂くと共に、われわれの方でも小見出しをつけるなど若干の編集上の配慮を行なっている。日本におけるアメリカ研究の発展の軌跡を明らかにするうえで、有意義な記録になりうるものと期待している。

1992年2月

東京大学アメリカ研究資料センター運営委員会



## 目 次

1. 生立ち .....	2
2. 青山学院より東亜海運へ .....	9
3. 太平洋協会をめぐって .....	12
4. 世界経済研究所よりアメリカ研究所へ .....	21
5. 原水爆禁止運動 .....	23
6. ベトナム反戦活動 .....	26
7. 太平洋協会の人々 .....	31
8. プラグマティズムとマルクス主義と .....	33
9. 太平洋協会アメリカ分室 .....	36
10. 戦後の状況 .....	37
11. アメリカ研究所について .....	40
12. 原子力問題への関心 .....	42
13. 「在野研究者」として .....	43
14. 国際的ネットワーク .....	53
年 譜 .....	56
著書・論文目録 .....	58



## はじめに

これまでこのオーラル・ヒストリー・シリーズでインタビューをお願いしてきた方は、ほとんどすべて大学関係者であり、通常の意味でのアカデミズムの場における研究者でいらしたが、この点、陸井三郎先生は大学に籍を置かれたことがなく、いわゆる在野の研究者として活躍してこられた。以上のことに限って見ても、先生がアメリカ研究に関わる研究者の中で異色といえる存在でいらしたわけだが、このような一般的にはより厳しい状況のなかで、あるいはそれ故に、アメリカについての先生の学術的あるいはまた評論的活動はきわめて精力的に進められ、日本におけるアメリカ研究の進展にとり重要な寄与をなされた。

先生が関心をもたれ分析に取り組まれたのは、主として現代のアメリカであり、アメリカ現代史の研究者と考えることが適切と思うが、その領域は権力構造といった政治学の方野から、経済問題、さらには対外関係にまでわたっており、学際的な広さに強い感銘を受けざるをえない。そしてとくに学術的分析と実践的活動との結節点に、先生のお仕事の意義が遺憾なく発揮されたと思われる。

このような活動歴をもたれる先生から、アメリカ研究に関する問題関心や諸活動の状況をうかがう機会をもつことができたことを、大変うれしく思っている。インタビューは1991年7月14日（日）午後、東京大学アメリカ研究資料センター会議室で行われ、聞き手としては、河村 望、油井大三郎、上杉 忍諸氏にお願いした。また著作目録の作成には藤本 博氏にお骨折りをいただいた。印刷にあたっては、インタビューの記録をもとに、陸井先生および聞き手諸氏に加筆訂正の労をとっていただいたが、本冊子の刊行にあたり、ご協力をお願いしたすべての方に、ここにあらためて感謝の気持ちを記したい。

1992年1月

東京大学アメリカ研究資料センター運営委員会

担当 新川健三郎

新川 きょうはお暑いところを、特にお休みの日にお集まりくださいまして、どうもありがとうございました。

東京大学のアメリカ研究資料センターでは、活動の1つといたしまして、日本におけるアメリカ研究の軌跡をたどるといいますか、明らかにする作業を行っておりますが、その中で、アメリカ研究のさまざまな分野につきまして、特に日本のアメリカ研究の草分け的な仕事をされた方、それ以後の発展にご尽力されてこられた方々から、直接お話を聞くというオーラルヒストリーを、10年余り前から行っております。これまでにおよそ25人ほどの方の話を伺い、それを記録にとどめて、小冊子を発行してまいりました。

きょうは、陸井三郎先生においでいただきましてお話を伺わせていただくことを、センターとしては非常に貴重な機会と思い、感謝いたしております。

これまでオーラルヒストリーで伺いました方は、概していわゆる大学で仕事をされてこられた方が多いのですが、特に陸井さんの場合は、いわゆる在野におられて非常に積極的に仕事をされてこられたという点でも、これまでと違ったお話をいろいろ伺えるのではないかと楽しみにしております。

お仕事の分野としましては、一言でいいますと、恐らくアメリカ現代史とあってよろしいのかと思いますけれども、政治、経済、さらには対外関係にわたります。非常に広い視野から、かつ、非常に実証的で綿密な仕事をされておられます。

ここでは、先生のたどってこられました、特にアメリカ研究を軸とする経緯とか、それぞれの時点での日本における状況、さらに先生からごらんになってのアメリカ研究の問題状況や問題点にも言及していただきながら、先生のお話を通して、日本におけるアメリカ現代史研究の1つの筋道といったものを明らかにする場にできたらと考えております。

聞き手といたしまして、河村望さん、油井大三郎さん、上杉忍さんの3人の方を煩わすことになりましたが、これまでもいろいろ準備してきてくださったことに対しまして、世話役としてお礼申し上げます。きょうはよろしく願いいたします。

それでは、早速、陸井先生の方からお話をお願いしたいと思います。

## 1. 生立ち

陸井 何か個人史についてお話をしろといわれております。それから、きょう私がお話しするのは、特に隠していたわけではないのですが、上杉さん、河村さん、油井さんにもお話ししなかったような側面も経歴的には若干出てくるだろうと思いますので、その2点を最初に申し上げておきます。

私は1918年の6月末の生まれです。実は私の世代は非常に変わってしまっていて、戦前は、20歳前後で殊に男子がかかる結核の死亡者が多かったですが、それだけではなくて、戦争時代に巻き込まれてきているので、特攻世代よりは数年だけ上ですが、戦争で一番たくさん死んでいる世代です。

戦争で死んだというと、よく皆さん方一般には戦争で死んだというだけですまされますけれども、恐怖のために戦線で発狂したとか、戦争末期には、召集されてその日のうちに入営し、その日のうちに船へ乗せられて、その日のうちに潜水艦で撃沈されて死んでしまったという、何のために召集されたかわからないような人たちが非常に多い。

そういう世代ですから、同じ年でいま社会的にいろいろ活動している人は、相対的には人数が少ないのではないかと思います。

さて、私10人きょうだいの同じ両親の7番目で、一番上の兄は死にましたけれども、あと9人は今まだ全部生きているのです。末弟が神戸大学の文学部の社会学をやっていて、去年か定年になりましたが、ちょうど一番上と一番下が男で、その中間に私とは7つ違いの兄と私がついて、その男の兄弟の中間にちょうど2人ずつ女の姉妹が入るといって、非常にバランスよく産み分けられているわけです。(笑)

私は東京・芝の生まれですけれども、両親は、今では常滑市に属している愛知県の知多半島の先の方です。私の考えでは、日本人は大体混血をしていますから、天皇家を含めてだれもかれも馬の骨だと思っていますので、別にどういう家だという家柄までいうことはないのですが、幕末から明治維新を

経た明治初年のころ活動した人たちが出た典型的な酒屋で、名主庄屋の家です。おふくろの方は、明治初期からあった地方銀行の仕事をやっていた家の娘らしいです。当時、隣の村になるわけですが、そこで結婚した。

おやじの方だけをお話ししますが、名古屋の商業、今でいう旧制中学を出てから、東京商科大学の前身のまだ大学になっていない東京高等商業を明治37年に卒業しました。1904年ですから、日露戦争の年ですが、当時でも何か徴兵猶予があったらしくて、卒業すると、戦争に行かないために、当時は専科と称したらしいのですが、今でいう大学院に1年行きました。そのため、当時、一橋大学は小さかったせいもあって、同級生の結束が非常に高く、僕らが子供のころから、明治37年、38年に卒業した「三七会」「三八会」を毎月やっています、それにはほとんど欠かさず出席していたですね。

卒業しましてから、家が割によかったものですから、おやじのおやじと一緒に横浜の郊外にでっかい家を買って、横浜を舞台に貿易商を始めたのです。数千坪あって、川があって山があるというような家です。

主として、満州の豆かすを買いつけて、それをドイツに輸出して、ドイツから機械を買うという貿易商をやっていたらしいのです。ところが、7、8年やっていたんでしょうか、それに大失敗しまして、お金がなくなって東京へ出てきた。

本来、割に商売人ではないのですね。ですから、当時の一橋の同僚だった人と、母校である一橋の図書館に通って、これから何をやるべきかを研究した。結局、これからは株式市場だということで、兜町へ行くための自転車を1台買って、友人の間をかけずり回って、大正2年か3年ころ、東京証券取引所の一般取引員という資格を得て会社を設立、大戦も始まるので、急激に業績を伸ばした。

この間から問題になっております4大証券の証券会社をイメージしてはいけませんが、当時の兜町は全部そういう一旗組でした。○の中に二を書くもので⊖という屋号で、当時の4大証券とか5大株屋といった方がいいんでしょうか、会社はかなり大きくなりました。



私の生まれたときはちょうど全盛期で、成功してから、私が生まれるはるか前の大正初年には、人力車のお抱えがちゃんとして、人力車でやっていたらしいのです。そのうちに、それが大型のビュイックにかわりまして、私が記憶している限りでは、家に大きな自動車があるのは当たり前のことだったのです。

しかし、人力車夫はそのまま解雇せずに家の雑用係でいて、僕らなどはいつもおんぶしてもらっていた。そのほかに、記憶している限りでは、女中さん、お手伝いさんがいつも7、8人いた。当時は親戚をみんな養うんですね。素性がよくわからないところ、はとこに、学費を出してやるというので、そういうのが何人もいまして、何か大変な大家族でいたわけです。

加藤周一さんが『羊の歌』を書いておられますが、あの方は文学者ですから、文学的捨象もあるのかと思いますけれども、私とは1つ違いなのですが、関東大震災の記憶が全然ないと書いてあるのですね。

しかし、私は関東大震災だけではなくて、その前年の1922年の4歳のときのことを覚えています。おやじが7番目の息子である僕ばかり非常にかわいがったのか、どこへ遊びに行くにも連れていくのです。

今でいう羽田空港のある近くの穴森というところに、父親が連れていったら、そこで食べたものが悪かったらしくて、子供がかかる、ひどいひきつけを起こす疫痢にかかってしまった。今の東大の医科学研究所ですが、当時は伝研といわれた伝染病研究所に担ぎ込まれたのですが、院長以下、これはもうだめだといわれたけれども、何か心臓が割に丈夫だったから助かった。

当時は簡易ベッドなんてないですが、個室の大きな部屋を取って、そのわきに母親がござを敷いて、布団を敷いて看病しているところとか、そのときのことを随分覚えています。

また、当時も今と同じ場所にあって、芝白金の医科学研究所のあるところですが、家から歩いてもそれこそ6、7分でしたけれども、退院するとき家の車に乗せられて、退院しました。

その翌年の4歳か5歳のときに関東大震災で、そのときの記憶があるので

すが、今は白金自然園になっているところが、昔は火薬庫跡でした。火薬庫といいますが、幕末に品川の砲台で使う火薬を貯蔵したところらしくて、明治以後はあそこは貯蔵してないのです。あそこは大変広大な自然が残っているところで、棒がたくさん立っている柵があって、子供の頭だと入るところがあるのです。そこにもぐり込んで、子供のころあそこで遊んだ記憶があります。

私が行った白金小学校は、当時としては東京で屈指の進学校らしいのですが、私は学区でしたから、別に越境したわけではないのです。おやじが保護者会の会長をやっていましたので、割合に寄附をしたんでしょうが、小学校ではいわゆるひいきにされる子だったわけです。

ところが、子供には生活の問題はわかりませんから、これは後で聞いた話とつながってしまうわけですが、実際には私が小学校の段階で既に父の会社は倒産していたわけです。これは金融恐慌の影響とか、おやじの会社から民政党の代議士を大量に出すといううわさがあって、政友会内閣につぶされたとか、うわさはあったのですが、そのことはいまだによくわかりません。とにかくつぶれたわけです。つぶれて、僕らにわかったのは、家に車がなくなったということだけで、お手伝いさんの人数も多少減ったかなという程度で、それほど苦痛はなかったですね。

中学は、青山学院の中学部に入るわけです。これが後でいろいろ尾を引くことになるわけです。中学3年の3学期の2月、15歳の時におやじが突然脳溢血で53歳で死にました。子供ですから大変なショックだったし、しかもきょうだい10人のうちで成年に達しているのは、人数としては半分もないわけです。上の2人の姉は結婚していましたが、あと4人の姉妹はまだ結婚していない状態だったのです。

ところが、上の方のきょうだいとか親戚とかでいろいろ評価をしてみると、かなり資産が残っていたのですね。具体的にいうと、ちょうど今の西武の堤氏のおやじさんが父と同期で、当時、箱根土地というのをやっけて、茅ヶ崎とか軽井沢とか山中湖といったあちこちの土地を、何千坪か何万坪か

買わされまして、大変持っていたらしいのです。芝の大きな家も残っていませんし、銀行の預金だけでも、その場で自由に使える現金が、当時のお金で5万円ぐらいあったというのですから、大変な金だったわけです。

ところが、当時は家督相続ですから、一番上の兄が財産を継ぐわけです。この兄はもう死にましたから構わないと思うのですが、その一番上の兄だけはでき損ないだとおやじがいていたようです。怠け者でもあるし、1つのことを長くやれなくて続かないということだった。この兄は、遊んだだけではなくて、おやじの後を引き継ぐ以上は、下のきょうだいもいるから、事業を起こさなければいけないというので、変な仕事を次々にやっただけですね。それで、あっという間にこれらの財産が全部なくなりまして、僕が中学5年生のときに行方不明になっちゃったのです。

僕は中学から上は行けないということで、兄が行方不明になる前に、当時日本ではつくれなかったボールベアリングの輸入会社でスウェーデンの日本支社であるSKFに、この兄がわざわざ僕の就職を世話してきまして、卒業後の進路は丸ビルにあるその支店にほぼ決まっていたんですね。

しかも、芝にあった最後の家まで担保にして高利貸しに金を借りていた。僕が中学5年生ぐらいのときに、兄に何かいい訳の手紙を書いた封筒を持たされて、麻布の高利貸しの家まで行かされたことがあります。兄とは14ぐらい年が違いますので、そのときに高利貸しが封筒を開いてから、「あなたにいても子供だからしょうがない。このまま持って帰ってください」といって、突っ返されてきた記憶があります。

結局親戚一同は兄を東京に置いておいたのでは、これ以上何するかわからないというので、父の一橋のときの同僚で、朝鮮で事業をしている人に頼んで、兄を日本の植民地だった朝鮮へ行かせてしまったんです。だから、敗戦まで兄は帰ってこなかったわけです。

次男は、今は小山台高校とっている府立八中の4、5年のころから、築地小劇場の影響で左翼運動にかかわってきて、エキストラにまでいろいろ出始めて入れ上げて、それから左翼になってしまった。



したがって、まだおやじが生きていたわけですから、当時旧制高校か、もしくはどこかの私立大学であれば、大学の予科に入るはずなんです、そんなことをやっていたから、最初1年浪人して、多分どこにも入れなかったんですね。それで、しょうがなく青山学院の文学部に入ったわけです。

そのとき、僕に記憶があるのは、中学の1年生のときの昼休みの時間に、僕から見れば大変大きい人ですが、高等部の知らない人にちょっと来てくれといわれて、高等専門学校と中学校の建物は向かい合っているのですが、学校の建物の裏の方へ連れていかれて、「あなた、陸井君の弟さんだろう。お兄さんはどうしているか」というんですね。僕はうそをついて「家にいますけど」といったんです。「家にいるんならいいんだけど、みんなが心配しているから」というんです。実は兜町の何とかの息子がアカで逮捕されたという記事が新聞にでかでかと出たらしいんですね。僕はそれを見ていないから知らなかったわけです。

そんなことがありまして、家で何事か起こったなということはおうすうすわかったのですが、そのうちに、兄貴は本当に家にほとんどいないようになって、1カ月に1遍か2遍帰ってきて、下着とか日用品を持ってはさっと出かける。だから、兄は青山学院も卒業してないし、どこも出てないんです。

ところが、これは戦後に母親に聞いたんですが、家に刑事が2人で次兄を逮捕しに来たんだそうです。ちょうど日曜日で、おやじもおふくろもいて、玄関で両親が刑事を出迎えた。兄は次郎というのですが、「次郎、警察で来いというから行きなさい」と呼んできて、「それじゃ、着がえしてくる」といって、兄は着がえに入ってしまった。しばらくたっても出てこないの、どうしたのかなと思ったら、家が大きかったものですから、裏口からどこかへ逃げちゃったらしいんですね。そうしたら、刑事が「またどこかで捕まえるからいいですよ」といって帰っていったという話を聞きました。

そんなことがありまして、家は非常にリベラルで、私もおやじやおふくろに怒られた記憶が余りないんです。おやじもそういうわけで、思想は余りよくわからなかったようですが、何か好きなことを若気でやっているなという

ぐらいの気でいたようです。

その兄の話をついでにしておきますと、のちに横浜で捕まったらしいのですが、結局転向せずに、東京地方裁判所で4年の判決を受けて、それから控訴しました。

一番上の姉の嫁ぎ先というのは、当時はもう既にやめておりましたが、政友会の院内総務をやっていた一流弁護士で、高等裁判所（控訴院）の判事もやっていた経験のある人でした。その人にいろいろ頼むと、これは、当時の日本の天皇制のもとでの裁判制度には随分抜け穴があったことは、ほかの方からも伺いましたが、何かいろいろ手を回しておいて、不転向でもいいから、そのかわり、転向しませんと裁判でしゃべらなければいい。そうすれば、情状酌量で執行猶予がつくというような了解を得た上で、今の東京高裁である控訴院に行きまして、執行猶予4年をつけられて、昭和8（1933）年の12月に出てきたのです。

その心労があったのかどうか知りませんが、兄が帰ってきて、目黒の雅叙園で年末のパーティをやり、その翌年の2月に、おやじが突然脳溢血で死んだという経過なんです。

そういうわけで、芝の家は夜逃げ同様にしてお出まして、おやじの会社の人が、恩返しだからといって、大森のずっと外れの方にある借家に、家賃は要らないからそこへ入ってくれというので、そこに引っ越しました。

私も一番上の兄が世話をしていた就職先が決まっていたわけですが、母親が、上の2人の兄は勝手なことをしていたのに、私だけかわいそうだというので、青山学院の高商部に、入学手続だけはしておいてくれたのです。文学部は、中学の成績が上の方半分ぐらいであればそのまま入れたのですが、高商部の方は少し難しく、上の方の3分の1か4分の1に入っていないと無試験ではないということだった。幸いそのぐらいには入っていましたので、無試験で入れたわけです。

## 2. 青山学院より東亜海運へ

ところが、あそこは旧制の専門学校ですが、4年制なものですから、ちょっと大変なんです。しかし、キリスト教の学校ですから、戦争が始まるまではアメリカのミッションから応援が来ていたせいも、私立にしては割に月謝が安いのです。光熱費を入れて年間で100円ぐらいでしょうね。

しかし、学費は結局自分でやらなければならないだけでなく、だれも生活を保障してくれる人がいませんで、弟はまだ私の7つ下ですし、2つ下の妹もいましたし、おふくろもいましたので、自分の食ベ口だけではなくて、何か若干プラスするぐらい積極的に家計に入れなければいけないわけです。

それで、中学のときの先生に頼んで、学生時代は家庭教師を大体フルにやっていました。

中学生の学校が終わってからの4時から6時ごろまでと、どこかで夜は外食し、7時から9時ごろまでというのをずっとやっていました。それでどうやら卒業することができたわけです。

しかし、今の学生は割に忙しいですけれども、当時の学生時代は、何だかんだいっても、学校の方はサボらなくてもゆとりがありまして、3つか4つ家庭教師していますと、当時のお金で最低60~70円、盆暮れには100円以上入ってくるんです。そうすると、当時の大学の卒業生の初任給よりいいんですね。ですから、それだけやっていたら、家の方に入れて生活は苦しくなかったし、学校も適当にサボっていたらよかったです。

高商部は、財政学とか英語とか、割に一橋の先生が来ていまして、一高の名物教授であった岡本忠之丞先生の英語は非常に役に立ちました。「イットはザット以下」なんという教え方ですけれども、(笑) カーライル、ラスキン、H. G. ウェルズとか、ちゃんと原書講読を教えてくれる。

みんながサボるので、3人か4人しかいませんでしたが、フランス語は例の平岡昇先生です。亡くなる前に、岩波新書で『平等に憑かれた人々』というバブーフの伝記を書かれた方です。あの先生とは非常に親しくなることができました。

ついでに申し上げておきますと、太平洋戦争が始まって、そろそろ物が不

足するころに、今渋谷のハチ公があるあたりに「東京パン」という喫茶店がありまして、そこで平岡先生とぼったり会ったのです。そうしたら、「いよいよインテリの苦難の時代が来ましたな」といわれた言葉が忘れられません。平岡さんはそういう方で、東大の非常勤講師ぐらいしかやっていたんでしょね。

しかし、私はこのときにいろいろな方と接触しました。例えば、それこそ1回だけですけれども、学校の講演会といっても、30～40人しか集まらない会ですが、三木清氏を連れてくるとか、頼みに行って清水幾太郎氏や萩原朔太郎氏を連れてくるとかいうことを学生時代に随分やりました。

清水さんとはそのときに知り合いました、当時だから32～33歳だったんでしょうが、大変な人気のある評論家でしたので、毎週火曜日の面会日の晩というと、清水さんの家の6畳の部屋はいっぱいになる。私はそこでいろいろな人と知り合いになりまして、安田武、福田恒存、いろいろなおかしな顔ぶれ、雑多な顔ぶれがいた。

ただ、清水さんからは随分いろいろなことを教えられました。原書講読をどうやったらいいとか、そういう本も随分自由に貸してくれる。それから、アメリカの本がぼつぼつ入らなくなってきたんですね。そのときに、日本でアメリカのデューイとかをやっているのは清水さんだけだということで、コーネルに留学をしていた南博さんが連絡をしてきて、ジョージ・ハーバート・ミードとかああいう本を次々に送りつけてきて、それをまた僕に貸してくれるということがありました。

南博さんとは戦後初めて会ったのですが、そのときに、南中央病院の御曹司だと聞き、いろいろ伺いました。

少し前半が長過ぎたのですが、そんなことがありまして、卒業いたしました、大学を出ていない以上、どこかの研究所、東亜研究所、満鉄の調査部、当時としてはかなり大きかった日鉄の調査部といったところには入れないわけですね。

それで、当時できました一種の国策会社である東亜海運の調査部を志願し



たわけです。これはやはりおやじの同僚である人が、日本郵船から横滑りをして、そこの社長になったので、そのコネを頼って就職して、実はそこの調査部へ入りたかったのです。

どういふ会社かと一言だけ申し上げておきますと、1940年ですから、そろそろ大東亜共栄圏などといふ始めたころです。ですから、大阪商船とか日本郵船といふいろいろな日本の大きな商船会社のアジア関係の部門だけを、全部吸収して1つの会社にさせたといふ会社です。ですから、これは数年寿命があっただけです。

そこへ入ってみたら、いきなり船へ乗れといふ辞令が出て、いきなり神戸へ行けといふのです。船会社は1年間は少なくとも船へ乗らなければいけないといふことで、船へ乗りましたが、船の中でも本ばかり読んでいたですな。  
(笑)

神戸へ行きまして、船の事務員で、初めは天津航路で、2遍行って帰ってきたところで、5月に、徴兵検査を受けた。船に乗っている人は港で検査をちゃんと受けられるのですが、本籍地で受けたいですといふ。愛知県の本籍の方が田舎で、下のランクにつけられる可能性があるものですから、愛知県まで行って丙種合格になったわけです。

それで神戸に帰ってきてみたら、もう船籍が変わって、別の船に乗れといわれた。就職したてですけれども、こんなところにいるつもりはない、もうそろそろやめようと思っていたんです。だけど、もうちょっといろいろ考えてからと思ひまして、今度は貨物船に乗せられました。これは新造船だったので、貨物船の方が楽なんです。お客さんが乗っていませんから、何もしなくていいのです。

今の広州へ1遍行って帰ってきて、もう1遍行った帰りのことですが、広州を出て、台湾の基隆へ寄って、そこで石炭を積んで帰ってくるときに、神戸ではなく、名古屋港へ入れといふ無電が入って、名古屋港へ入ろうとした。そのときに非常な濃霧で、明け方に伊勢湾に入る三重県の大王崎というところで大変な座礁をしてしまったのです。浸水し始めまして、幸い座礁して岩

の上に乗っかっているのです、沈没はしなかったのですが、そこでは明治時代に駆逐艦が2つ折れになって全部死んだ場所だとか、いろいろ聞いたことがあります。

ところが、遭難しますと、下級船員は船に残されないのですが、見習いみたいな者でも私は高級船員なんです。それで船長以下7～8人だけ残るグループに入れられるわけです。いよいよこういうところにいるべきではないと思いました。そこで、手続が全部終わって、サルベージの船が来て、応急に穴をふさいで、そのサルベージの船に曳航されて、大阪のドックに入った後に、東京へ帰ってきて、1940年の7月にはわずか3か月でやめることになりました。

そうしたら、辞職願いが出ているというので、おやじの友人である社長がびっくりして、いきなり来いといわれた。平社員でも退職の辞令だけは決裁が社長まで行くらしいのです。「どういうわけだ」というから、これこれかくかくで、私の希望はこういう方面ではないといったら、「しかし、あなたの考えている道はなかなか大変だし、容易ならぬことだよ」といわれた。同じようなことはその後もいわれまして、事実大変だったわけです。

そこをやめましてから、翻訳などをやって、23か24のときに本を1冊出したことがあるのです。そんなことをやったり、いろいろなアルバイトをやっていた。

### 3. 太平洋協会をめぐって

これは清水さんの紹介で、1941年ごろから話はあったのですが、太平洋協会に昭和17年（1942）の6月1日から来てくださいといわれた。そこには平野義太郎氏がおられた。

誤解はないと思いますが、太平洋協会は、太平洋問題調査会（IPR）の支部では全くなくて、IPRの日本のセクションは、当時から銀座に事務局だけがあるんです。何か会議があるときだけそれを組織するのであって、IPRそのものの研究機関は日本にはないわけです。大学の人とか、いろいろ

な人を連れてきて、そこで会議をやるということで、実際にはIPRはなかったわけです。

鶴見祐輔氏が、ちょっと古いタイプではありますが、後藤新平の娘婿ですから、太平洋を往来すること何十回というほど抱負経緯は非常に大きくて、たしか昭和12年（1937）ごろ、太平洋協会を文字どおり民間の任意団体としてつくったわけです。

コム・アカデミー事件は昭和13年（1938）でしょう。平野義太郎氏が、本郷の東大法学部の研究室から検事局の車で連れていかれた。ほかにもいろいろな人がやられました。

鶴見さんと平野さんは奥さんの筋で親戚になるのですが、鶴見祐輔さんが、あんなことをやらせておくと、また何かあるかわからないというので、平野さんを引き取って太平洋協会に入れたわけです。

ところが、鶴見祐輔さんはバランス感覚が非常にいい人で、ちょうどその後におこった河合栄治郎事件で、河合栄治郎の弟子と一緒に東大を辞職した山田文雄氏と一緒に協会に入れたわけです。

ですから、小さな団体なのに大変な組織で、平野先生は調査局長、山田文雄氏は研究局長なんです。しかし、局などと称しても部屋はそんなに多くないし、下に何人もいない。ところが、採用される人はちゃんと系列化されていて、山田文雄氏のところには、後に民社党の参議院議員にもなる関嘉彦氏とか、石上良平氏とかいう人がちゃんといましたし、平野先生のところには、私などは全く無色の若造ですが、もと講座派だった人とかがいる。ただ、大部分の人は、政治的には無色透明な人だったということは、一応念のために申し上げておかなければいけない。

ところが、私が入ったときには、1942年の、真珠湾が始まって半年ぐらいのときですから、徴兵されそうな人は、既に南方の執政官になったりして、調査のためと称してフィリピンとかああいふところへ逃げているんです。ですから、研究スタッフがいない。そうでなければすでに召集されてしまっているわけですね。若い人はほとんどいないという状態でした。



ここで私のアメリカとのかかわりを一言しておきますと、青山学院の学生時代に、アメリカ帰りの経済学の先生の大木金次郎氏が訳したスチュアート・チェイスのニューディール論（邦訳『新経済工作論』）を読まされましたが、さっぱり分らなかった。太平洋協会に入った直後に読んだ百々正雄『ルーズヴェルト十年史』で大いに啓発され、戦争中だったにもかかわらず、アメリカはすばらしい国で、明るい社会だと思いました。

そんなこともありまして、最初の半年は太平洋協会の資料室にいなさいといわれた。資料室はちょうどこの部屋ぐらいの大きさで、もう少し縦長ですが、そこの本棚にはぎっしり本で、間を通るのにも体を斜めにしなければいけないぐらい本がたくさんありました。少なくとも開戦までのIPRの文献資料とか、リファレンスブックとかというものが全部そろっていました。

そこの資料室に見習いでいたのですが、半年もいれば、大体どういう本があるか全部わかりますから、借りたい人が来れば、すぐその場でわかるような状態になった。そこで、E・ハーバート・ノーマンの『近代日本の登場』という本も自分で見つけて、だれも手の通っていなかった本ですが、初めて読んでびっくりしたということがありました。

その資料室のときに、幾つか研究会で研究報告をしたら、非常にいい報告だというので、研究室へ上がれといわれて、別の部屋にあった研究室の方へじきに上げられました。

しかし、テーマを与えられているわけではなくて、やはり何か戦争協力ですから、当時平野先生は、非常にジャーナリスティックな感覚が強いといわれたのですが、別に時局に合わせたというのではないんでしょうけれども、激戦がソロモン諸島あたりで起こると、それはもちろん文化人類学、地誌、自然等だけしか書いてないんですが、『ソロモン諸島とその民族』という大きな本が出るわけです。それから、それこそ枕になるような厚い本で『ニューギニアの自然と民族』という本がやはり出るわけです。

こういう本はもちろん外部の人も大変協力したのですが、私はそういうものは一切まだかかわらずにやってきたわけです。しかし、この時代は非常に

よく勉強できたと思います。

太平洋協会というのは変なところで、外務省を経由してかどうか知りませんが、中立国スイスを経て、戦争中にアメリカで出たIPRの本とか“アメリカ”などの雑誌が、時々断続的に入ってくるのです。日本でやっと出てくる本と違いまして、きれいですし、紙はいいですし、それだけで、ありがたいで涙が出るという感じがしましたね。そういうのを1冊1冊一生懸命になって読んだ記憶がございます。

アメリカの東海岸にいた日本の留学生が、真珠湾攻撃後の日本に帰るべきかどうかをみんなで集まって討議して、昭和17年（1942）に留学生が交換船で帰ってきたわけです。鶴見さんは早速目をつけて、その人たちを集めて、太平洋協会にアメリカ分室をつくったわけです。これは、内幸町の本部があるところではなくて、丸の内の三菱の赤レンガが当時あったところの一角を2部屋ほど借りました。

室長は坂西志保さんです。大正12～13年ごろに女高師を出てからアメリカへ渡りまして、ライブラリー・オブ・ kongressの東洋部長をずっとやっていた人です。大変男まさりというよりは、女丈夫といたい、気風のいい人です。

帰ってきた当時は42～43歳でしたが、その人を室長にしまして、その当時はみんな無名でしたが、後のことを考えたら大変な顔ぶれなんですね。鶴見和子・俊輔の姉弟が当然いるわけです。ただ、俊輔さんの方は病身で、結核をやっていて、全く出てこなかったです。和子さんと、都留さんは帰ってきてすぐに外務省の調査官になりますから、本職ではありませんが、時々顔を出す。武田清子さん、松岡洋子さん、都立に行った阿部行蔵さんは、アメリカの宗教です。それから立教大学で、後に立教大にアメリカ研究所をつくるときにお金を出した細入藤太郎氏、エトセトラ。帰国組でない人では清水幾太郎・福田恒存氏など。

みんなアメリカから帰ってきた人で、その人たちの話を聞くために研究会を開いて、私はそこの研究会へ出てもいいという許可を得て、毎週そこに

行っていました。ただ、裸で帰ってきた人たちですから、蔵書1つあるわけじゃないわけです。研究室があるだけで、ほとんどそこの人たちも、本部のある方のライブラリーに本を借りに来るという状態で、事務室があるだけだった。

しかし、そのアメリカ研究会は余り教えられるところはなかったですね。和子さんがトックヴィルを研究して報告をすとか。武田清子さんは結婚されて子供ができたので、1、2年でじきにやめられた。数年前に電話で話したときは、「あのとき、私はすぐやめちゃって残念だった」といっておられました。松岡洋子さんは当時から大変活発でした。

そんなことがございまして、アメリカ研究とのかかわりもそこででき、都留さんとも顔なじみになるという経過があって、戦後、私は占領政策が大体1946年ごろから急激に変わったなど、トルーマン・ドクトリンよりもずっと早くはっきりわかったです。別に2・1ストとかそういう労働問題じゃなくて、日々感じられた。

それから、これは私は全く関係ないのですが、戦前、日米学生会議というものがあつた。2度ぐらいしかやらないはずですが。1回はスタンフォードでやって、日本でも1回やった。数年前、法政大学で占領の研究会をやったときに来日したエリナー・ハードレーは、日米学生会議で戦前日本に1遍来ているのです。

彼女は財閥解体の責任者として、日本の財閥研究をやるというので戦後すぐいきなり赴任してきたのです。当時28~29歳でした。私より2つ3つ上の友人が、日米学生会議でスタンフォードに行ったときにエリナー・ハードレーと知り合いになったらしいのですが、その友達が、エリナー・ハードレーが日本に来ていて、第一相互ビルで財閥研究をやっているから、それを手伝ってやってくれと私にいわれた。

そのため、ほかのある友人と3人ぐらいで、エリナー・ハードレーと接触した。彼女は池田成彬とか藤原銀次郎といった財閥の大物呼びつけてヒヤリングをやっているんですよ。もう嫌になっちゃった。(笑) アメリカ式研究

方法でもあるし、占領者の特権ですね。彼女は辛うじて日本語は読むのですが、しゃべることはできないです。私たちはもちろん占領政策には全く関係ないし、知りもしなかったのですが、何を読むべきか、あちこちの本で日本語を読むお手伝いをしたりしました。

ところが、彼女は翌年の1946年6月には、マッカーサーと意見が違うと言って帰ってしまったのです。ですから、正味1年はいません。マッカーサーという人のパーソナリティーもかなりあったかと思いますが、ニューディールの気風というのは最初の数カ月だけだったということは、気配で当時わかりました。

もう1人、都留重人氏が当時の顔なじみでした。これはのちに1957年に上院での都留証言でコミュニストとして名前が出てきますが、本当のコミュニストかどうかは私は知りませんが、ローゼンフェルトという人が経済科学局のある課長をされていて、これもやっぱり日本の財閥研究をやりたいという同じテーマで、都留さんに、どんな本を読むべきかとか、この人の勉強の手伝いをしてやってくれといわれた。

ただし、ローゼンフェルトは日本語ができないんですよ。おまけに英語のわかりにくい人で、何かぼそぼそ口の中でいっていて、最初にペイの交渉をしたのですが、自分のポケットマネーから払うか、それとも、3カ月なら3カ月の契約で、ここの職員として登録した方がいいかという。どちらがいいかといわれても、こちらはよくわからぬ。そうしたら、「いや、名義上ここの職員になった方がコンビニエントである」というのです。彼にとってはコンビニエントですけども、(笑)それで、3カ月ぐらいその人のお金をもらった記憶があります。

その後、全く音沙汰がなかったのですが、都留証言で都留さんは、やはりその人と占領下で連絡があったということを追及されていますね。同じ経済科学局にいるのですから、関係があったのは当然なのですが、マッカーサーイズムにおける guilty by association とはそういうものでした。

話が前後しますが、私が初めに太平洋協会の資料室に入れられましたとき



に、資料室にも3つ、4つ机が置いてありまして、私に与えられた机の隣に40過ぎの人がいましたので、私は若造なもので、これから付き合っていくので名刺を出さなくてはと思って名刺を出したのです。そうしたら、その人も名刺をくれて、風早八十二と書いてあるのです。風早さんてこの人かと思ってびっくり仰天したのです。

私は左翼の本も既に読んでいたのですが、それ以外のものもたくさん読んでいましたから、講座派の本は読んでいましたし、風早さんの『日本社会政策史』も読んでいましたけれども、その著者が隣に座っているとは知らなかった。恐らく平野さんが生活のために半端仕事を渡していたんだと思いますね。

それから、のちに日本資本主義の戦後をやっていた守屋典郎氏が、また古代史の伊豆公夫氏が、いろいろ半端仕事を時々もらいに来たりしていました。しかし、そういう左翼ばかりではなくて、非常にリベラルな人たち、具体的にいうと、例えば神近市子さんとか、文化人類学系の人たちとか大変広範囲の人が、戦争中お金に困って、平野さんのところに原稿の仕事してもらいに来ていました。

そういうところにおりますと、研究会というより、外部の人を呼んで毎月いろいろ話を聞くわけですが、例えば後に吉田内閣で外務次官、外務大臣になる岡崎勝男氏が外務省の勅任調査官で、当時のヨーロッパ戦局などを話してくれる。新聞に書いてないような、ソ連がずっと勝っていてナチスが負けているとか、太平洋戦局とか、中国の戦局、八路軍や新四軍のことも実に的確にわかるのです。戦後の岡崎氏とは大分ちがっていました。

その研究会をやるときには、昭和19年（1944）からだと思いますが、一橋にいた上田辰之助氏が協力して、平野さんと2人で、その当時は太平洋協会がありますので、正式には戦後になって東亜学術協会となるのですが、その前身の日華学芸懇話会と称するものを太平洋協会の内部につくるわけです。明らかに敗戦後にそなえた研究団体だったわけです。

それは物すごい顔ぶれで、当時節電でエレベーターが5階まで来ませんの

で、お年寄りが杖を突いて5階まで階段を上がってくるのですが、柳田国男先生も来る。末弘巖太郎氏、今中次麿、賀川豊彦、羽仁説子等々のお歴々。呼んでくる人は、三木清とかいろいろな人を次々に呼んできまして、月に3回か4回ぐらい開いていた。上田辰之助氏は自分もスポンサーですから必ず来ていました。

ちょっと信じがたかったのですが、当時どうして鶴見さんが都合したのか、お昼に弁当が出るのです。ジャガイモの入ったご飯ではあるけれども、お米の弁当でした。それもあって集まったのかもしれませんが、(笑)非常に出席率がよくて、当時でいえば社会的にかなり名の知られた方々が40~50人が毎週集まった。

そこは1年ぐらい前から、日本の敗戦は避けたいという議論が平気で行われているような場所でした。戦争中に連合国のいろいろな宣言が出ていますね。テヘラン会談とかカイロ会談がそういうところで全部詳しくわかって、僕らも知ることができましたし、ウィルキーの「ワン・ワールド」、ヘンリー・ウォーレスの「ザ・センチュリ・オヴ・ザ・コモン・マン」の訳も内部資料として出す。後にポツダム宣言も直ちにそういうことでわかったわけです。平野先生自身は、8月9日のソ連の参戦まで敗戦は口にしませんでした。

そういうことがございまして、太平洋協会の時代は、資料はある、自由な時間はある、給料は非常にいい。もっとも給料はあっても、買うものはないわけで、辛うじて古本屋に行って本を探してくるぐらいですが、普通の大学の研究室にいるよりも自由で、本当に思う存分勉強ができた時代だったと思います。ですから、敗戦はショックでも何でもなく、予期していた待望の事実の到来で、ほんとうにうれしかったです。

敗戦になりまして、鶴見さんは太政翼賛会にも入っていましたし、戦争に協力したということで、みづから太平洋協会を解散することを、9月2日に全員を集めて申しわたしました。太平洋協会の若干残された資産は、山田さんと平野さんに分割する。平野さんの方は日華学芸懇話会の後身である東亜学術協会、山田さんの方は太平洋文化協会をつくって、両方とも実体はない

のですが、それぞれに別れた。私は戦後雇った事務員の女の子と2人だけ、平野さんのところに残されました。

平野さんの周辺も敗戦後は急に忙しくなりました、大陸から帰ってくる人、戦地から帰ってくる人、刑務所から出てくる人、いろいろな人がずっと押しかけてきたり、占領軍の人が次々と訪ねてくる。何かに書きましたが、オーエン・ラチモアとかE・ハーバート・ノーマンが1945年10月に訪ねてきたのもそこなんです。突然平野さんを訪ねてきた。両方とも平野さんとは旧知の間ですから。

ノーマンと知り合ったのもそのときでした。当時は日本人の側からは何をやっているのか聞くことはできませんでしたが、情報将校で、戦争犯罪を調べていたのですね。太平洋協会には雑誌のバックナンバーや、非公開の官庁や東亜研究所・満鉄などの資料が全部あるわけです。そういうものをチェックすればいろいろわかるわけです。戦争犯罪の調査と、民主化のための政治犯の釈放もやった人ですから、毎日のように来ていました。

僕はそのお相手をしていたので、ノーマンとは非常に親しくつき合うことができて、時々は缶詰とかコーヒーなどのお土産をいろいろ持ってきてくれるようなことがありまして、非常に懇意にしてもらえたのです。

ところが、実をいうと、戦後左派系の研究機関になるいろいろなものは、旧太平洋協会の大きな広間が母体になるのです。具体的にいいますと、民主主義科学者協会、財団法人世界経済研究所、社団法人中国研究所、国民経済研究協会、エトセトラ。活動を始めてからは、明治大学の隣にあった旧東亜研究所のビルに全部移りますが、内幸町にあった旧太平洋協会の社屋の中でそれができたのです。ですから、またそこに集まった人たちのお世話をすることで、いろいろな人と知り合うことができたということ。

ところが、1946年のいつごろだったか記憶はありませんが、山田文雄さんと平野さんがやっていた2つの団体は、旧太平洋協会の会計係が共通でそのまま残っていたのですけれども、ある日、山田さんにお金をほとんど使われてしまったことがわかったわけです。平野さんに「もうお金がないんです」



といわれて、突然クビにされた。

それからは生活は実に大変でした。一時出版社のアドバイザーをしてみたり、1947年のノーマンの『兵士と農民』の翻訳を出したり、いろいろなことをやった。そして1951年にさっき申しあげました世界経済研究所へ入ったわけです。しかし、それ以前、占領下の初期で、今度『ハリウッドとマッカーシズム』という本のあとがきにおおよそ書いたことですが、ほとんど毎日日比谷のアメリカ文化センターに日参していました。定期刊行物から新刊書から、かなりいろいろなものがそろってまして、本当にそこにしかなかったのです。半年ほど前、NHKの「日本の電子立国」という番組をみましたら、電子とかトランジスターの研究をやった人びとも、戦後すぐに、やはりこのアメリカ文化センターにかよって、懸命にアメリカの新しい文献のノートをとっているのです。自然科学系の人びとも、あそこが唯一の窓口として利用していたのですね。

#### 4. 世界経済研究所よりアメリカ研究所へ

アメリカ文化センターに日参しているうちに、世界経済研究所に入るのでありますが、それと前後して、ノーマンとの関係で、『オーディール・バイ・スライダー』（1951年『アメリカの審判』）という本をみすず書房から出版しまして、それにくわしい解説をつけて、それが一応評判になり、それを契機にして、何か一応アメリカの専門家になれたということだったと思います。

それからは、アメリカについてあちこちに書く機会がふえてきました。しかし、世界経済研究所は、はっきりいいまして給料をくれない。財団法人だから基金がなければいけないのですが、基金はとうの昔になくなって、戦後インフレですから、あってもわずかのものですが、みんなで群れをなして仕事をしてお金をつくるということだった。

当時私も結核をやっていましたし、そういう人が割に多かったので、健康保険と厚生年金だけは払ってもらった。そのおかげで、今でも年金がわずか出ている。当時給料を20年ぐらいいらっていたことになっていましたから。

そこに11~12年ぐらいいて、いろいろな仕事をやりました。あちこちに書いたりしまして、所長は平野さんではあったのですが、実質は小椋広勝さんでした。

小椋さんは、戦争前に同盟通信社にいた人で、香港特派員をずっとしてまして、戦争が始まって直後ぐらいに、岩波新書の赤版で『香港』を出している方です。相当緻密に仕事をする方で、マルクス主義者ですが、戦後はたしか青木文庫から『ウォール街』という本を出しています。この方はお子さんが多くて、のちに立命館大学に就職された。

あともう1人、岡倉古志郎さんがいたのですが、この人は、世界経済とか国際関係をやる人ではなくて、ご存じのとおりアジア・アフリカ関係をやる人だったのです。結局1960-61年に残った人びとはアジア・アフリカ研究所に改組することになって、任意団体としてつくった。それで私は、アジア・アフリカ研究所に改組したのを機にやめるわけです。

それと前後して、南博さんがアメリカで親しくなった芳賀武さんという人が、日本へ帰ってきて、アメリカ研究所をつくりました。

アメリカに留学して東海岸にいた日本人留学生が、真珠湾の後で日本に帰るべきかどうかをみんな集まって討議したときに、東条支配下の日本に帰っても仕方がないといって、結局南さんだけが帰らなかったのです。だから、彼は非常に豊かな家庭の人ですが、戦争中、送金を断たれて、アルバイトをし、芳賀さんという方に世話をしてもらったという経過があったらしくて、それで親しくなったらしいのです。

芳賀さんは大正6年(1917年)からハワイ移民としてアメリカに行って、さんざんいろいろなことをやって、たしかアメリカ共産党に入ったと思います。東海岸にいて、戦争が始まる前は、横浜正金銀行の現地採用でニューヨーク支店にいたはずで、戦争が始まってからはOSSに協力して、OSSの仕事はずっとやっていたわけです。

彼は大変精力的な人ではありましたが、研究者というタイプではない。文字どおり活動家です。その方が、マッカーズムその他の影響で、アメリカ

にもいづらくなって、1955年に日本に帰ってきた。

帰ってきてからは、たしか日本社会党の黨員になったはずです。日中国交回復運動を随分熱心にやっておられた方で、戦争中にOSSと中国の問題をやっていたという関係があるのだと思います。

彼は最後にはニューヨークでローゼンバーグ処刑の抗議運動、処刑された日の大デモにも参加している人ですから、日本に帰ってきてみたら、アメリカの民衆のことが当時まるでわかっていないということをいわれました。

南博さんから1962年に話がありまして、芳賀さんという方がアメリカ研究所を株式会社組織でつくりたいけれども、実際には、あの人は活動家で、いろいろ調査・研究をすることはできないからその手伝いをしてやってくれというのです。はっきりいって、私はまだどこかへコミットして義務を負うのはかなわぬと思ったので、それじゃ、仕事をして原稿を書いて、原稿料ベースでという契約ならばやりましょうという条件で、1、2人の友人を誘ってそういうことを始めたわけです。

ただ、1960年代の前半というと、まだそうそう簡単にアメリカの定期刊物とか、議会議事録とかを読めるものではないのに、芳賀さんはアメリカにいろいろコネがあるものですから、電話をかけたりにして、航空便で次々にどんどん取ってくれるわけです。それは非常にありがたかったですね。

そんなことを4～5年やっているうちに、芳賀さんが病気になって、あとを引き受けてくれといわれた。そのときには基金もなくなっていたわけですが、会員制度などで何とか維持して、1972年ごろまでどうやら名前は残したということだろうと思います。

定職がないですから、それ以後はいろいろなことをやってきたとしか申し上げられないわけですが、クロノロジカルに一応お話ししてきました。

## 5. 原水爆禁止運動

あと、ノーマンとのかかわりの中でいいますと、大塚久雄さんとか、戦後若手で急に出てきた日本の歴史学の人たち、『中世的世界の形成』の石母田

さんとか、藤間生大さん、そういう人がみんなノーマンに会いたがるのです。そういう方々と親しくなった中で、ノーマンとの面会をセットしてくれといわれた。

なぜこんなことをお話しするかといいますと、1952年のある日、神保町から水道橋のところを歩いておられますと、松島栄一さんに呼びとめられまして、喫茶店に連れ込まれました。当時、朝鮮戦争が始まっています、戦争反対の日本文化人会議をつくったというのです。今なら文化人なんという名前はつけないだろうと思います。これは朝鮮戦争に反対する会で、国際的な連絡をやるし、いろいろな人の交流をやっているのです、それにぜひ参加しろといわれまして、参加したわけです。

戦後すぐに南さんにまた会いましたけれども、南さんともそこで親しくなる。いろいろなジャンルの方、草野信男氏ともそこで知り合ったわけです。

しかし、1950年代の前半はまだ大変な時代で、草野さんが例えば1953年にドイツからウィーンの視察から帰ってくると、みんなで話を聞くという状態です。海外へ行った人の話は大変珍しかった。

そういうことがありまして、上原専祿先生が初代会長、2年でかわって次が阿部知二さん。それからなかなか引き受ける人がなくて、清水幾太郎さんが60年安保ごろまでやっていたんだだろうと思います。

そこでいろいろの交流がありましたが、私は、平和運動の原水爆禁止運動には、初めに原水爆禁止協議会が組織されたビキニ水爆の翌年の1955年は参加していません、1956年からです。1956年に参加したときに、いきなり専門委員にされまして、かなり深くコミットせざるを得ない羽目になったわけです。

そこで、毎年世界大会と称するものをやるわけですが、日本における同時通訳はあそこから出てくるのです。初めのころはイヤホンで聞いていますと、殊にイントゥー・イングリッシュの方ですが、50年代の日本の同時通訳というのは、「ウィー、ウィー」なんといっていて出てこないんですよ。(笑) 今名だたる人たちは、みんなあそこで修行しているのです。本当の国際会議を



やったわけですが、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカから全部呼んでくるといのはあの運動以外にはほとんどなかったのですね。アフリカの人に会うとかいので、人も来るし、お金も最初は大変集まった。

そこで私が感じたのは、40年代の後半の中国革命は大変なものだ。殊に戦争中から、東亜研究所や満鉄の内部資料でほとんど読んでいたし、『遊撃戦を論ず』とか、『整風文献』とか、ああいうものも読んでいましたから、大変なものだと思っていたのですが、はっきりいって、原水爆禁止の運動に参加する中で、中国はおかしいと思った。後に文化大革命になったときも、日本のインテリもかなり共感した人が多いと思うのですが、私はこれには組みすることができなかつた。それは50年代から平和運動のなかで中国代表を見ていたからだと思います。

例えば、フレンド・サービス・コミッティーの代表ができて、ベトナム反戦でも大活躍するクウェーカーのフリッチマンという牧師さんが、アメリカ代表でやってくるわけです。演壇に上がって、「私は今ここへ来て演説することよりも、アメリカの戦争努力を何としても阻止する方がずっと大事だ」といった声涙あふれる演説をしてくれるわけです。

そうすると、アメリカのああいう人たちは、本当にマッカーズムさなかに日本に来ること自体が困難なのだということが私たちにはわかるわけです。だから、万雷の拍手なんですけど、中国の代表は一番多くて、毎年50人は来ているのですけれども、一切沈黙なんです。拍手もしないし、手も挙げないし、声も上げないです。

ちょうど日本の侵略政策の時代に、いい日本人と悪い日本人を区別しちゃいけない。すべての日本人を憎めという中国共産党の政策がそのまま踏襲されていて、いいアメリカ人と悪いアメリカ人はいないという考え方がやはり貫かれていたのと、ちょうど大躍進の時代でもあったということだと思えます。これは異様な光景でした。

それから、しゃべることも、後に原水爆禁止運動という唯一の平和の統一団体が分裂することになる大きな原因は、本当はあれはいかなる国の核実験

にも反対するというようなものでは決してなくて、根底にあった違い、本当の原因は、アメリカ帝国主義との戦いを想定しないような平和運動は平和運動ではないという中国代表の意見に、日本の内部で感染する人たちが非常に多かったということです。

私はそれが納得できないんですね。それで、工業大学にいた畑幸雄氏とかあいう人たちと、もう途中で帰ろうと行って、それから2～3年は出なかったのです。そのうちに分裂したという経過がございました。

## 6. ベトナム反戦活動

それから、ベトナムについていえば、私は世界経済研究所にいた時代から、第1次インドシナ戦争（1946-54）のころから、多少はフォローしてきて、関心も持っていた程度であって、世界政治とか民族解放運動に関心を寄せるという程度において関心を持っていたのです。インドシナ休戦のジュネーブ会議にも関心を持っていましたが、特にベトナムということではなかったのです。

しかし、いよいよ1965年2月から北ベトナムの爆撃、北爆が始まりました。そこで大きな運動が始まって、そのときに明治大学で大きなシンポジウムがあったのですが、そのときにベトナムについて何かコミットした最初でした。

それから翌年、ベトナムにおける戦争犯罪調査日本委員会が組織されて、これはバートランド・ラッセルの呼びかけにこたえての各国にできた対応組織ですが、これも初めは非常に広範な人々が結集しました。

そこで、1966年末にラッセルの方のヨーロッパにおける国際調査団と呼応して、日本からも調査団を出さなければいけないことになりまして、急遽、1966年12月にベトナムに調査団を出すことになったのです。しかし、当時は国交のない国には行けないのですね。それから出国するのも、1回だけのパスポートですから、出国できないのです。

パリにあるセンターからパリへ来いという電報を打ってもらって、香港まで行って、香港で中国入国ビザを得て、広州まで行って、文化大革命の真っ

最中ですが、広州でベトナム領事館へ行って、そこでビザを得たという形です。広州、南寧、ハノイという経路で往復とも1週間ずつかかる。北爆のさなかですから、難行苦行でした。ついでに一言すれば、次に旅券申請したときに、外務省旅券課で、あなたは旅券法違反（申請時の目的国以外の国に行った）をおかしていますね、と言われました。

それを契機に、ベトナムの戦争に極端にコミットするような形になりました。詳しく話をすれば長くなりますが、1969年には単身で1回行きましたし、ニクソンの機雷封鎖とB52のじゅうたん爆撃が始まった1972年の5月、6月には、別の友人と2人連れで、もう1回ベトナムに行くということがあったのです。

実をいいますと、今まで私は、生活することが割に大変なのと、食うにはそれほどは困らなかったにしても、収入が不定期的なんです。だから、年間に青色申告をするときに月別に収入を割ってみると、月収はそれほど悪くないんです。ところが、入ってくるときは入ってくるけれども、入ってこないときは入ってこないという状態ですから、非常に所得が不規則である。

だから、海外に行くだけぐらいが入って、どうやらお金はつくれるんですが、収入が1カ月あくと、皆さんはよくご存じのように、印税原稿料はずっとおくれてしか入ってこないですから、そうすると、何カ月後に収入に穴があくのです。ですから、海外にはそう出られない。海外へ出る余力があるときとか、割にそういうお話があるときにも辞退するというところで、ほとんど出なかったです。

1966年にベトナムに行ったのが初めての外遊です。それからまた急に出るようになって、癖のようにめっちゃくちゃ出始めましたけれども、海外へ行くこともなかなか大変なことでした。

これは皆さん、私のそばで見ているとよくご存じですが、突然ヨーロッパへ行く。これはベトナムに行くのに時間がかかるし、パリならば、アメリカの問題についてベトナムの人たちと非常にいろいろ協議し合えるし、話し合えるし、はっきりいってこちらも勉強になるのです。



ガブリエル・コルコがベトナム戦争の歴史を書いています。ハノイ側が持っているベトナムの資料を使っているわけです。アメリカの敗戦後に捕獲した資料ですね。

ベトナムに最初に行ったときから、非常に強烈な印象を受けました。1966年の暮れから1967年の1月21日までいましたので、ジョンソン大統領の年頭教書が出たとき、すぐに向こうの参謀部の人、そのテキストをラジオで聞き取ってタイプで打ってありまして、雑音が入るのでところどころあいているんですよ。それを読んで感想をいってくれというのです。

それから、ハノイの社会科学院で話をしたときも、僕は政治の話がいいと思って、政治の話をしたのですが、出てくる質問は、アメリカの景気循環とか主として経済の質問だった。

また、アメリカ人は当時ハノイにたくさん招待されていたですね。左翼だけではなくて、スーザン・ソントグ、チョムスキー、トム・ヘイドン、メアリ・マカーシーなどいろいろな人が見えていました。

ベトナムの担当者が僕に、メアリ・マカーシーはどうだろうというんです。僕は、あれはヴァッサー・カレッジ的だなということをちょっといったんです。だから、いいんだといわれて、びっくりしたのです。アメリカのいわゆるインテリの中流のところに影響力のある人に来てもらいたいんだということで、メアリ・マカーシーも行っているわけですね。

僕が初めてベトナムに行ったときに、空襲警報が鳴ったので、ハノイの防空壕に入ったら、WSP（ウィメンズ・ストライク・フォー・ピース）の人たちが3～4人来ていました。大変ノイジーな人たちで、防空壕の中でべちゃくちゃしゃべっていたのですが、1人黙っている人がいるから、だれだろうなと思ったら、バーバラ・ミングが来ていたのです。彼女はデーブ・デリンジャーと「リベレーション」誌をやっていた人で、大変な女傑ですね。

1972年にヴェルサイユで、インドシナ諸国民のための国際会議が開かれまして、それにも日本から大勢行ったのですが、僕はほとんど会議には出ないで、裏方の根回しをやっていたのです。

これはエピソードですが、コルコ夫妻がある日パリで、その会期中に、午後8時にあるレストランへ来てくれというので行きましたら、何とジェーン・フォンダが前に座っているんです。私はその年の5、6月にベトナムに3度目に行くことになっていました。私はその当時すでに2度ベトナムに行っていて、空襲の状況など分かっていたのですが、ジェーン・フォンダは行きたいと思っているがまだ行っていないので、ベトナムのことを話してやってくれというのです。

ところが、僕の英語ではとうていフォローしていけないという問題以上に、ジェーン・フォンダという人は大変よくしゃべる人で、こっちが口を挟めないぐらい、とうとうしゃべりまくるんです。(笑)パリに来たアメリカ逃亡兵がいかにかひどいことを見てきたかを、ダーッとしゃべるんですよ。

帰るときになって、コルコ夫妻だってもちろん旅先ですし、僕も旅先ですから、車なんか持っているはずがないのに、彼女は「車を持っている人がいたら送ってくれ」というんです。「ない」といったら、それじゃ、地下鉄で帰ろうとって、僕と一緒に地下鉄で帰ってきたのですが、ジーンズをはいて、化粧っ気のない普通の格好をしていたので、だれ1人気がつかなかった。

これには後日談がありまして、空襲のひどい機雷封鎖のさなかに、数カ月後にベトナムに入って、ベトナム側はもう危険だから、外国のお客さんは帰ってくれといわれて、今度ばかりは2週間で帰るというときに、ハノイの飛行場で飛行機を待っていたら、僕の待っている飛行機からジェーン・フォンダがおりてきて、これから初めての訪問で、視察するところだというわけで、その飛行場でまたかち合いました。

あとは落ち穂拾いですが、1つ、2つ、ついでに申し上げますと、1961年、安保闘争の翌年に、原水爆大会がありまして、これは分裂直前ですが、ハーバート・アプテイカー氏が来たのです。ある集会で講演しまして、話はどうかということとはなかったですが、ケネディ政権の性格づけをやってくれたのが、今でも強烈な印象として残っています。

彼はマルクス主義者で、アメリカ共産党系の理論家として聞こえている人

ではあります。書いたものをごらんになったことがあると思いますが、アメリカという政治的コンテクストをよく心得た上でやる人ですから、ウォルター・リップマンの分析なんかもなかなかいい。

日本のスタンダードでいえば、ケネディ政権などというのはどうにもならない右派の政権に見えるだろうが、戦後のアメリカの歴史の中ではベストの政権であるという性格づけをして、アメリカの政権としては、あれはリベラルないい政権なんだ。したがって、我々はケネディ政権を支持する人びとを支持しなければならないといたしました。

そのことと、もう1つは、60年安保闘争のさなかにアイゼンハワー大統領がフィリピンまで来ていて、岸首相から招かれながら、ついに来られなかったことがありましたね。そのことが割に日本人の間では関心があったので、アメリカにおける大統領の訪日中止のインパクトはどうであったかという質問をアプテイカーにだれかが出したのです。彼は考えて、一言「コンシダブル」といったんですね。アメリカにとっては余り大したことではなかったんでしょう。

1962年にはSDSのスーザン・ミラーという女の子が来たのです。当時から日本の時計はよかったんでしょう。銀座で時計を買いたいというので、和光に連れていったのです。銀座で、何かちょっとした店でビフテキをごちそうしてあげたら、アメリカではハンバーグだけで、こんなビフテキは食べたことがないと言ってえらく感動していました。

彼女にいろいろ話を聞いたら、サンフランシスコであった例の1960年の非米活動委員会の出張聴聞会の抗議運動は、大変な騒乱状態になったのですが、あれに参加して、非米活動委員会を追っ払ったときに、これでマッカーズムに勝ったと初めて思ったとっていました。僕らもそうかなと思いました。

実はそのときには、あの騒動になった出張聴聞会があったことを僕は知らなかったのです。後で油井さんから当時の録音もいただきましたけれども、そのとき初めて詳しく聞きまして、ああ、なるほどとわかりました。

そういうことがいろいろございまして、平和運動とかベトナム戦争とかの

かわりに参加することも、いろいろと自分のやりたいこととのかかわりで、研究にも意外に役立ったと思います。割にプラグマティックに、こちらも勝手に利用するということがあったと思います。

大分時間が超過しまして申しわけございません。

新川 どうもありがとうございました。

一応クロノジカルな形でお話しいただきましたが、これからは、聞き手の方にそれぞれの問題関心に即して質問していただき、それに答えていただくという形で、内容をより豊かなもの、掘り下げたものにしていきたいと思っております。

## 7. 太平洋協会の人々

油井 お話を伺ってちょっと意外に思ったのは、戦争中大変自由に研究をされていたというお話で、太平洋協会そのものはかなり国策に協力するような機関だったのじゃないかという気がするのですが、どういうところから資金が出ていたのですか。

陸井 満鉄、南洋興発、東洋拓殖、拓殖銀行とか、そういう植民地経営会社が当時は存在していたわけですね。創立当時はそういうところから出ていた。ただ、我々には全くわからなかったけれども、殊に真珠湾以後は、臨時軍事費で使い捨てですから、恐らく軍からもかなり出ていたと思います。

僕は下っぱだったから全然関係はなかったのですが、例えば今のインドネシアなんかの物すごく詳しい地図があって、あの辺で戦争をやっていたとき、いい飛行場候補地はないかと聞かれて、地図を一生懸命探して、平らそうなところがある、ここがよさそうだといってやったら、後で非常に役に立ったという返事があったといううわさを聞きました。

油井 委託研究というか、政策立案に関係するような研究という性格もかなりあったのでしょうか。

陸井 あったんでしょうね。ただ、これはいろいろな方の傷にもなると思いますから、記録に残るかどうかわかりませんが、風早さんなんかは、旧満州



と北支那（当時の華北）における労務政策、具体的にいうと、あそこは幫頭<sup>バオニョ</sup>制度という中国古来の組頭の制度があって、それを使うと労働力を集めやすいとか、そういう研究をやっていたということは本人から聞きました。

油井 アメリカ研究分室の場合はトックヴィルを読んでいたというお話で、余り戦争には役立たないように思うのですけれども、どういう性格なのでしょう。

陸井 鶴見さんは親米派で、内心は対アメリカ講和派だったんです。だから、昭和19年（1944）の6月に東条内閣が倒れて小磯内閣ができたときは外務大臣になるつもりだった。和平をやるつもりで、アメリカ分室と本部と両方の和文タイピストを総動員して、自分の外交政策に関する文書をつくらせ、送り込んで、自分は藤原銀次郎氏の別邸にこもって組閣本部からの電話を待っていた。一時事務員は総動員されていましたよ。

結局大臣にはなれなくて、その直後に協会の総会みたいなのがありまして、全員集まって鶴見祐輔氏がしゃべった。大臣になれなかったことは決して恥ずかしいことじゃない、政治家を志した以上は大臣を志すのは当たり前ですという弁解を聞いたことがある。坂西志保氏は女傑で男まさりですから、自分のところで使っている和文タイピストまで動員されたので、「大臣1匹つくるのは大変だ」なんて口調でいっていました。

油井 鶴見さんは、戦前から、グルーとか知日派のほかの外交官ともつながりがある人ですね。和平交渉の動きに直接こういう研究会が関係したことはないのでしょうか。

陸井 鶴見さんは学芸懇話会には全然出てこない。平野さんと上田辰之助がスポンサーですから、そこはリベラルの巣窟みたいなものでした。敗戦を論じ、戦後処理を論じ、そういうことを自由にやっていました。あれ、よく問題にならなかったと思います。

油井 軍からにらまれたり、特高から追いかけて回された経験は全くないのですか。

陸井 1942年に企画院事件というのがありまして、これはフレームアップ

ですけれども、社会党に入った佐多忠隆氏、和田博雄、岡倉古志郎、こういう人がパクられて、半年ぐらいぶち込まれたらしいですね。

僕は戦争中、岡倉さんが左翼だなんて全然知らなかった。古在さんの親友で、岩波文庫で『フランクリン自伝』を訳している松本慎一さんという方が麴町のしもた屋を借りて総合インド研究室をやっていて、そこに前橋正二、鈴木正四、岡倉古志郎、そういう人がいたんです。

僕は、その「総合インド月報」に、あるインドの文献のブックレビューを30枚ほど書いてくれと頼まれて、そのとき平野先生に、岡倉天心の孫でえらく才走った男がいると紹介されて、初めて知りました。僕よりは7つか8つ上じゃないかな。

アメリカのおもしろさとか、思想とか、清水さんから随分インスパイアされましたね。

清水さんは東大の戸田貞三先生のところにおいて、副手のときに、当時は大河内さんの方が左派で、大学に残れないといわれていたのが、大河内さんは結局残れて、清水さんは追い出されるという経緯があったらしい。

河村先生はよくご存じだけれども、卒業論文をちょっと加筆した『社会学批判序説』なんていうのはすごいものですよ。『日本文化形態論』ははっきりいってマルクス主義のものですけれども、正式に転向はしなかったんです。

これはご本人から聞いたのですが、羽仁五郎氏の『日本資本主義発達史講座』を下請で大分書いたらしいんですね。羽仁さんとは非常に親しくて、戦前清水さんの家に行くと、斜めに本が立つドイツ製の特殊な書棚があって、『フィヒテ全集』なんかあって、「これは羽仁さんからもらったんだ」って自慢していました。

## 8. プラグマティズムとマルクス主義と

河村 清水さんが亡くなったときに、「社会学評論」に清水社会学について何か書いてくれと頼まれまして、追悼論文だから褒めなければいけないと思って、清水さんはアメリカのプラグマティズムを初めてよく理解して日本

に紹介した人だということを書くつもりで、清水さんの本を読みなおしたら、清水さんはプラグマティズムを全く理解していないんですね。マルクスにたいしてもそうでしたが、ミードの社会行動主義を客観主義、科学主義の立場でしか理解していない。

今から見ると、プラグマティズムの方がマルクス・レーニン主義よりはるかにましなところがあって、その点では、鶴見俊輔さんあたりの方がプラグマティズムの本質をはるかによくとらえている。ミードのもの、とくに『19世紀の思想動向』を読む前までは、鶴見さんのアメリカ哲学の理解は並み大抵のものでないと思っていたけれども、ミードとかデューイをきちっと読むと、鶴見さんがその人たちの理論をかなり援用されているのがよくわかる。

その点と関連して、冷戦期、陸井さんは左翼側からのアメリカ研究を中心にされてきて、一方ではマルクス主義も必要でしょうが、アメリカのプラグマティズムのようなものに対して先生がどう評価されているか、ちょっとお伺いしたいと思うのです。

陸井 難しいことはわかりませんが、今いわれたことにかかわっていえば、鶴見俊輔さんがアメリカ留学のことを書いた岩波新書の中で、当時の雰囲気をも多少弁明している章がある。アメリカのプラグマティズムは帝国主義のイデオロギーだといわれれば、そのとおりにはいないのだが、しかし、非常に積極的な現実解釈の場合に、マルクス主義なんかよりずっと有用な点があるのだという趣旨のことを書いておられて、僕はそのとき本当にそのとおりだと思った。僕は鶴見さんとは親しいのですが、本は余り読んだことがないから、鶴見さんをどう評価していいかはわからないのですがね。

戦争当時、本が入荷できなくなってきた、丸善でスペシャルプライスという棚に売れ残っていた本が載っていた。そこに『コンテンポラリー・アメリカン・フィロソフィー』という上下2巻の本があって、これは、デューイ、サンタヤーナ等を含めて、当時アメリカの哲学者でトップにいる人たち30人ぐらいの論文集でしたが、清水さんに勧められて非常に熱心に読んだ。教文

館にもそういうものが売れ残ってたくさんあったんです。

そういうものを随分読んでノートをとって、どこか心の隅では身についていたのでしょうけれども、河村先生みたいにいわれると、僕は専門的、系統的にフォローアップしていませんし、記憶も定かでないので申し上げられないんです。

河村 僕自身は陸井先生のゼミの門下生で、陸井先生から日本の左翼のイメージとは違ったものをいろいろ勉強させてもらったので、そういうのがどこから出てくるのか、ちょっと聞きたいと思ひまして……。

陸井 清水さんの影響ももちろんあるでしょうけれども、それだけじゃない。私の家がそういうぐあいで、左翼だった兄の影響はほとんど受けていないし、兄の本を使ったことはないけれども、金持ちだったから、円本時代以来の世界文学とか日本文学が全部家にありまして、そういうものを中学生のときから本当によく読んでいました。日本語で出ているものでないものはなかったですね。

上杉 どなたがそろえられたのですか。

陸井 上の方のきょうだいです。当時のクラシックのSPレコードの膨大なコレクションもあって、中学3年ころから気遣いみたいになって聞きました。だから、僕は、戦中派というよりは、ある意味では戦前派なんですよ。ちゃんとした大学を出られなかったけれども、旧制高校的で教養主義だね。

油井 マルクスの古典もお宅にあったのですか。

陸井 それはほとんど自分でそろえた。古本屋の書棚にほとんど並ばなくなっていて、裏に置いてあった。ただ、大変高くて、『日本資本主義発達史講座』などは、1931～1932年に1円が出たのですが、当時古本屋で2円ぐらいました。それから、系統的ではないけれども、改造社のマル・エン全集がばらで入ってくるので、欲しいものを探しました。

油井 清水さんの影響でアメリカ哲学を勉強した時期とほぼ平行してマルクスなんかも読まれたわけですか。

陸井 はい。



油井 当時、どちらの影響を強く受けましたか。

陸井 敗戦が近くなるにつれてマルクス主義ですね。清水さん自身、敗戦が近づくにしがって、公にはとてもいえないけれども、私語では「マルクスがいておるとおりになってきたな」なんていい出した。

あのころの清水さんは大したもの、神がかって竹やりでも戦えという時代に、科学的、合理的精神こそ必要だというときに、海軍技術中将である多田礼吉中将の科学精神を引用しながらそれを説くとか、そういうことをいろいろやっていたわけですね。

## 9. 太平洋協会アメリカ分室

油井 アメリカ分室に留学帰りのアメリカ通の方々がいっぱいいらっしやったわけですね。そういう方々から思想的な影響を受けることは余りなかったですか。

陸井 それはないですね。交際はいろいろありましたけれども。

油井 それはどうしてでしょうか。

陸井 はっきりいっておもしろくなかった。(笑)

油井 研究会では例えばどういうことをされていたのですか。

陸井 例えば阿部行蔵さんの『アメリカの宗教』とか、和子さんも、トックヴィルの『アメリカン・デモクラシー』をやったんだけど、率直に言って本当におもしろくなかったね。我慢して聞いていたようなものですよ。

あとは、戦後みんな翻訳が出ますが、ウィルキーの『ワン・ワールド』とか、ヘンリー・ウォーレスの『ザ・センチュリー・オブ・コモン・マン (凡人の世紀)』とか、キューリー夫人の娘のエーヴ・キューリーの『戦塵の旅』とか、戦争中に出たものがみんな入ってきて、それは原書か内部で翻訳したものを読めた。その報告会をやるとか、そういうことでしたから、知識は得るけれども……。俊輔さんは病気でずっといかなかったし、武田さんは早くやめられたしね。

油井 アメリカ分室は、日米戦争の生々しい戦況を追いかけることはして

いなかったわけですね。

陸井 まるでしていません。月給払って勝手に遊ばせていたんですよ。はっきりいえば、鶴見祐輔さんの趣味でしょう。

河村 先生は、日本のアメリカ研究が戦後軌道に乗ったのはいつごろだとお考えですか。

陸井 60年代になってからじゃないでしょうか。殊に、50年代にフルブライトで留学して向こうで本式にやっこられた方々の仕事が出ましたからね。

戦前でも、恐らく外務省あたりでは若干やっていたかもしれないけれども、堀江保蔵氏が『アメリカ経済史』を書いています。フロンティア理論を大体そのまま祖述したもので、敵としてのアメリカ研究は日本では意外に出ていない。早く亡くなりましたが、戦後木村禧八郎さんと一緒にやっていた土屋清氏が中心になって、慶応のグループが『アメリカの戦争経済能力』という本を出したくらいです。

油井 高木八尺先生はアメリカ分室には全く関係なかったのですか。

陸井 ありません。

油井 高木先生の周辺では、和平の動きに関係したようなことがいわれていますね。

陸井 あれば、吉田茂の動きとか、幾つもの動きがありましたし、政治的動きで割に偉い人が多かったので、僕らみたいな若造にはわからなかったんです。

## 10. 戦後の状況

新川 戦後、1946年に、高木八尺氏が中心になってアメリカ学会を発足させる動きがあったわけですが、先生のような立場にいらした場合は、そのような動きがあるといった情報が入ってきたのでしょうか。それとも、余り知らないままに学会はスタートしたのでしょうか。

陸井 今のように大学に外からのアクセスがなかなかない時代ですし、そういうことはニュースとしても伝わりにくかった。民間にいても定年退職し

たような大物の方は別でしょうけれども僕らにはほとんどわからなかったですね。だからこそアメリカ文化センターみたいなところに通うことになった。事実、高木先生のところでも資料なんかがどの程度入ってきたのか、僕らは知らないんです。

油井 太平洋調査会が戦後再建されますね。戦前とはかなり顔触れが変わって、大内兵衛さん山田盛太郎さんなんかも入って、かなり人民戦線的な知識人が中心になってきますけれども、そういう動きと世界経済研究所の人たちとは関係があったのですか。

陸井 これは全く関係ない。都留さんは、経済安定本部（今の経済企画庁）ができる、そこの次長に抜擢されて行ったわけですが、その前、マッカーズムが出てくる少し前ですが、46～47年当時、都留さんが経済科学局に勤めているときにIPRの話があった。IPRの戦後の再建については、占領下初期に「ぜひ、やろう」という動きがあって、都留さんがその動きに参加しようとしたら、「あなたは身を引いてもらった方がいい」といわれたから、「私は参加していません」という弁明を上院の聴聞会で証言していますね。

都留さんは聴聞会で、占領軍の経済科学局に採用した安藤次郎という男は коммуニストではないのかと聞かれて、「安藤さんを入れたのは間違いだったので、やめてもらいました」と答えています。

油井 この当時占領軍に来ていたトーマス・ビッソンとかノーマンなんかもこの再建の過程にかかわっているような感じですね。

陸井 さっきお話ししたラティモアとノーマンに会ったぐらいです。T. A. ビッソンとかいろいろな人が来ていたのですが、僕らは活動もしていませんから、特に紹介されない限り、そういう人に接触する機会はなかった。そういう人の名前は後で随分聞きました。文献は、ノーマンを通じて、T. A. ビッソンの『Japan's War Economy』とか、ああいうものをどンドン手に入れましたね。

油井 たしか鶴見俊輔さんがどこかに書かれていたのですが、戦前にアメ

リカに留学した知米派の人たちは当然英語が達者ですから、占領軍が来ると協力を依頼されるけれども、こだわりがあって、占領軍に協力しない人たちも随分いたということですが、陸井先生の場合、占領軍との関係ではどういうお気持ちでしたか。

陸井 ハドレーとは戦争直後から接触があったわけですが、46年6月に追い出されて帰っていく。彼女を通じて見ていると非常に不安だったんです。ハドレーの動向だけではないけれども、薄々わかる。マーク・ゲインが追い出されたとか、いろいろうわさが入ってくるわけですね。

油井 それで、占領軍に協力することに対しては非常に警戒的だったのですか。

陸井 ええ。後に神戸大学に行った弟は、水戸の旧制高校にいたときに、はかまに朴歯のげたを履いて毎週教練に出ていたから、僕はある日教務主任に呼ばれて、「あなたの弟さんはもう退学処分です」といわれた。それで、弟は水戸の高等学校を途中でやめざるを得なかった。

当時、東北大学だけは専科制度があって、高校は出ていなくても専科に入ってお直りができたので、しょうがないから、清水さんの紹介状をもらって、雪の深いときに神明正道氏に会いに行行って、頼んで専科へ突っ込んでもらって、本科へお直りして出られたんです。

その弟が、当時20か21ぐらいで、戦後焼け出されてから麻布の借家に同居していたのですが、占領軍の文句ばかりいって、部屋に「打倒！ アメリカ帝国主義」なんて書いて張っているんですよ。

油井 それは軍国青年だったからですか。

陸井 全然軍国青年じゃないです。ほかの人みたいに敗戦のショックはまるでなくて、占領軍は本当にいいと思っていたのに、ふたをあけてみたらそうじゃなかった。

僕が占領軍を見たのは非常に早かったんです。太平洋協会は内幸町の東洋製缶のビルにありまして、その真向かいがNHKの本部で、そこへ1945年8月下旬に、横須賀に入った海軍の軍艦に乗ったジャーナリストが何人か、N



HKの玄関で「東京ローズに会わせろ」と守衛のところへ押しかけてきた。スcoopだったのでしょうけれども、守衛と押し問答しているのを窓から見て、これはおもしろいというのでわざわざ見に行ったことを覚えています。

## 11. アメリカ研究所について

新川 ちょっと後のことになりますが、私はアメリカ研究所に非常に関心がありますので、うかがわせていただきます。アメリカ研究所は62年に出現したわけですが、芳賀武さんがそもそもどういう問題意識でこういうことを始められたのか。文献資料収集が中心なのか、それとも研究出版に力点を置くような研究所を意図されていたのか、あるいはその双方なのか、どうなのでしょう。

陸井 芳賀さんは、55年に帰ってきてから日中国交回復運動をずっとやっていたんですが、日中国交回復運動には戦前から地盤がありますから、関西のビジネスマンがかかわっていたんです。そのコネを使って、日中国交回復運動をやっていた実業家から当時のお金で250万円を集めた。それで、4分の1払い込みであれば4倍の資本金ということで、1,000万円の株式会社をつくった。

人様のお金をたくさん集めて、まるきり任意団体にしておくと経理がいいかげんになる、株式組織にすれば、きちんと経理報告もして監査役もつくらなきゃいかぬということで、株式会社にしたらしいんですね。社団法人や財団法人は、基金の利息だけで活動しなきゃいけない。だから、当時でさえ、5,000万円とか1億円集めなければとても運営はできなかったと思います。

新川 それで、なぜアメリカ研究という分野で……。

陸井 それは全く私の自発性じゃなくて、芳賀さんが日本に帰ってきたら、アメリカの民衆とか人民の動きが全然伝えられていないと彼自身が感じたのでしょうかね。彼は戦後日本に帰ってからも社会党でしたが、戦争中はOSSに参加をし、アメリカ共産党に入っていた。

数年前に90歳で亡くなったのですが、亡くなってからも奥様が残ったもの

を整理して、ハワイの移民のとき、カリフォルニア移民をやったとき、ニューヨークへ行ったとき、それぞれの段階の活動、生活をメモアールにして、6冊ぐらい出ています。

新川 どのくらいの方が集まったのですか。

陸井 研究会を組織しても人が余り来ないし、数人でやっていたんです。株式会社ですが、はっきりいって僕はコミットするのは嫌だったので、重役にもならなかった。資料を読ませてもらえればありがたいから、そこへ行って資料を見るということで、書いた原稿料だけいただくという約束でやったんです。

新川 大学に関係のある方はほとんど研究所にはいない状態で続いたのですね。

陸井 はい。

河村 『アメリカ事情』とか、翻訳したものが定期的に刊行されたのですか。

陸井 出して、会社とか、協賛する人びとから購読料をもらう……。

河村 大学機関でも買っていたところは多少あります。

新川 中国問題に関する上院の公聴会の翻訳なども、たしかアメリカ研究所ですね。

陸井 あれは、66年2月のベトナムに関する初めての公聴会で、非常に急ぎまして、66年のうちに出たと思います。三一書房に非常に有能な編集者が1人だけいて、雑誌がやるべきなのにやらないから単行本にするといって、僕ら手分けしてやったんです。

新川 出版物は多くはなかったわけですか。

陸井 ほとんどないですね。今、河村先生がいわれたように、賛助してくれた会員の方に配るタイプ印刷のものを出していた。

内幕をいっては悪いけれども、株式会社ですから、芳賀さんと何人かの役員をつくり、監査役もつくったのですが、その人たちが安いけれども給料をもらって、基金をかなり食いつぶしちゃったらしいんですね。だから、芳賀

さんが病気になって僕が引き受けるころは、会員は残っているけれども、基金はほとんどない状態でした。

新川 私などはかなり遅い時期までアメリカ研究所の存在さえ知らないでいたものですから、申し訳ない気もしておりますが。

陸井 いえ、ろくなこと何もしていませんから。ただ、私個人では得をしたということですか。

油井 発足が62年ですから、ちょうど世界経済研究所をやめられてこちらに移られたわけですか。

陸井 1年ぐらいありましたかね。

油井 1951年に世界経済研究所に入られたわけですね。世界経済研究所自体はもっと前からあったのですか。

陸井 さっきお話ししたように、戦後の混乱の中で東亜研究所の建物を乗っ取っているんですね。世界経済研究所と中国研究所、国民経済研究協会、民主主義科学者協会が同じビルで活動を始めるわけです。

## 12. 原子力問題への関心

油井 目録を拝見しますと、初期に原子力の問題で『エコノミスト』なんかにも随分論文を書かれていらっしゃると思うのですが、その当時、特に原子力の問題を専門的に研究しようというお気持ちがあったのですか。

陸井 1つは時代ですね。世界経済研究所の仕事として、ジェームズ・アレンの『アトミック・インペリアリズム』を僕が中心になって手分けして訳したのですが、これはアメリカの原子力産業がどう発展してきたかということで、戦時中のマンハッタン計画なんかも実によく分析した、今読んでもいいものです。

冷戦の中で、49年にソ連の核実験があり、予想していたとおり、54年にソ連の方が先に原子力発電所をつくってしまう。あれなんか日本では大ニュースでした。あの当時出されたソ連の発表は、プロパガンダのやり方としてもうまいですね。わずか5,000キロワットのパイロット・プラントですが、平

和目的のために近隣の町に原子力で電力を供給し始めたということをいったので、大変なショックだったわけです。

文部省の助成金をもらって、これはタイプ印書ですが、小椋広勝さんと2人で原子力問題についてそれぞれ100枚ぐらい書いたことがあります。

油井 事典のようなものも出していっちゃいましたね。

陸井 これは大勢の人でやったんです。55年だったと思いますが、原子力問題は当時日本で大騒ぎでした。中曽根氏が科学技術庁長官でしたが、読売新聞がゼネラル・ダイナミックスの社長を招んで、原子力ブームが起こった。日本でも、核兵器の問題と平和利用の問題が一挙に表に出てきたわけです。後で役に立ちました。

油井 原水爆禁止運動が始まって先生が専門委員を頼まれたのは、当時原子力問題の専門家という形で見られるような素地があったわけですか。

陸井 それとともにアメリカでしょうね。55年に発足しますが、それはまだ何が起こるか分からないような団体でした。

上杉 原水禁運動の中で、中国についての認識を相当早くから持っておられたというお話ですが、ソ連はどうだったのでしょうか。今、ソ連のそのころの問題が随分いろいろ出ていますね。

陸井 世界平和評議会というソ連系の団体があって、ソ連からも毎年やってきましたけれども、僕らがその当時知った限りでは、ソ連はそれほど力を入れていなかったですね。55年から始まり、僕が参加したのは56年からですが、ちょうどフルシチョフ時代で、翌年にはソ連のICBMが出てきたし、アメリカでさえソ連の科学技術に追いつくには初等教育からやり直さなければだめだという議論が出てくる時代でしたからね。今日から見ると隔世の感ですけれども、事実そういう時代でした。

### 13. 「在野研究者」として

河村 率直なことをお伺いして失礼かもしれませんが、外国研究をインディペンデントでおやりになる際、常に心にとめておかれたことは何



かありますか。

陸井 困ったな。(笑) やせ我慢は随分あったでしょうね。例えばフルブライトなんかでアメリカに留学した方に負けられないようにしたいということがあった。

だから、アメリカをやろうとだんだん固まってきてからは、つまらないことですが、これはなかなかわからないことなので、アメリカの土地勘みたいなものをつけるようにしたり、マスコミ、映画、小説、あらゆるもので、研究に直接役に立たないようなことまで調べたり読んだり、それは随分やりました。

例えば50年代のいつごろかは忘れましたが、あるものを翻訳していて「ミュージカル」という言葉が出てきたときに、わからなかったんです。ミュージカルの映画は戦前からたくさんあるし、宝塚なんかは戦前からやっていたのはミュージカルでしたけれども、言葉としての「ミュージカル」はなかった。「ミュージック」の形容詞かと思って調べたら、別のジャンルでそういうものがあることがわかった。

河村 陸井先生の訳されたドムホフの『現代アメリカを支配するもの』の一部を分担させてもらったとき、その中に「ディスコティック」という言葉がでてきて、あとになったら、すぐディスコと訳せるのですが、当時はディスコなるものが日本にまだなく、辞書を引っ張って、注釈をつけて、ひと苦労した覚えがあります。

陸井 そういう問題は随分あります。僕の経験をついでに申し上げますと、「SAKS 5th アベニュー」という言葉が出てきて、字引を引いても、ウェブスターを引いても、何も出ていないので、たまたま会えたアメリカ人に聞いたら、げらげら笑い出して、「SAKSというのはニューヨークの高級婦人服のデパートだよ」といわれた。後でニューヨークに行ったときに、しゃくにさわるから、8階から下までずっと見てきたけれども、上へ行くほど値段が高く、下へ行くほど大衆的になるんですね。至るところでそういう問題に突き当たって、1つ1つ覚えていきました。

油井 50年代のマッカーズムの時代に、アメリカ自体の学問が非常に体制順応的になって、それに対して非常に信用できない、自分は、議会の聴聞会の記録とか、政府の報告書とか、そういう1次資料を自分の頭で考えて分析するのだということを書いていらっしやいましたが、アメリカの学問は信用できないと考えるきっかけになったような研究はありますか。

陸井 具体的に「これだ」というのはないですね。ただ、50年代、60年代ごろから出てくる人が書いたいろいろのものを読んでも、どうも違うのじゃないかという感じは絶えずありました。

ただ、1次資料といいましても割に安いので、買えないということはない。国務省のブリティンは無料ですね。あれは、今は順番待ちですけれども、当時は割に自由に手に入ったんですね。

上杉 機関に所属していても、資料を集めるのはなかなか大変ですけれども、先生のように機関に所属されてないで個人で資料を集めるのは大変だったと思うのです。

陸井 本式にそれができたのはベトナム戦争ですよ。個人的にやってくれる人は若干はいたから、議会記録などをたまに頼むことはできたけれども、向こうにとっては面倒なので、そう頼むことはできないから、系統的に手に入れることはなかった。けれども、自分でも外へ出るようになったことがあります。ベトナムについては、こちらもいろいろコントリビュートする機会ができてくると、ギブ・アンド・テークという関係ができますから、いろいろな点で相当自由にやれるようになりました。海外に行ったときに、「あっ、おまえか」とお互いにわかるような関係がだんだんできてきました。

油井 先生としては、北爆が恒常的に行われるようになった65年2月以降にベトナム戦争の問題にコミットするようになったわけですね。初期の重点はラッセル法廷ですが、ラッセルの呼びかけで、日本側の受け皿作りはどのような形で進んだのですか。

陸井 あれは大体法律家が主張してつくったんですね。けれども、アメリカが相手だから専門家がいらないといけないし、当時ベトナムの専門家は日本

に1人もいませんでしたから、入れといわれて、入って半年ほどして事務局長をやらされた。もっとも、政党がいろいろ介入してきて、腹を立てて翌年やめちゃったんです。

新川 ほんの限られた期間ですが、駒場で大学の授業をお願いしたことがあったようですね。そのとき、大学での授業、あるいは学生とのつき合いということをもっとコンスタントにということは考えられませんでしたか。

陸井 特に積極的にやらないということではない。でも、頼まれる機会もそうなかったです。地方の大学の集中講義ぐらいなら、時々行くことはあったんです。

法政は割に長く続いたのですが、ちょうど学園紛争の真っ最中で、あそこは中核派で、常時武闘訓練のスネークダンスをやっている。そういうのが続いて何か事がおこりそうな日は、教授陣は行方不明になって、非常勤講師だけが大学にいるんです。(笑)

僕の話は割に人気があったので、70~80人いたと思いますが、ある日僕が大教室で講義をやっていたら、その中に反対派がもぐり込んでいたのかどうかはわからないけれども、ゲバ棒を持ったのが大量に入り込んできて、教場内で殴り合いが始まったので、僕は「これはとても続けられないからやめる」といって帰ってきちゃった。ばかばかしいので、それ以来出なかったのですが、学生は単位を取りたいですから、72年か73年の3月だったかな、試験はやって、それでやめちゃったんです。大学当局は身の安全さえも保障しないので、行けない状態だった。(笑)

油井 ご自分で、大学では余り教えたくない、在野で通すのだというお気持ちがあったわけではないのですか。

陸井 それはそれほどないです。そんな肩ひじ張ってませんよ。

駒場で60年前後に講義をしていたときは、ここの学生は全く秀才だと思ったですね。かなり考え方の違う中屋健一先生のところと私のところに出てきて、両方とも85点以下はつけられないような答案を書くんだな。

油井 何を教えていらっかったのですか。

陸井 アメリカにおける科学技術政策みたいなこと。原子力関係からかかわって、1910年に始まるヘンリー・フォードのT型フォードからアメリカの科学技術には割に関心があって、それと経済発展に非常に興味があったので、そんなことをやったんです。

油井 そうすると、教養学科にあるアメリカ科の授業ですね。

陸井 よくわからない。(笑)

新川 少なくとも僕がアメリカ科の学生だったときには記憶にないんですね。

陸井 「あなたは大学で全然教えていないから、一遍そういうことを経験した方がいい。お金は大して出せないけれども」といつてきたのは江口さんだ。

油井 そうすると、国際関係論かもしれませんね。

上杉 今のこととかかわるのですが、戦後、歴史家でもかなりの数の在野の研究者がいたわけですが、実際に日本ではそういう人が食べていくことは大変だったと思うのです。

陸井 中央公論社とかあちこちで、初版を10万部出すようなものが次々に出てきましたから、歴史家は食べられたはずですね。

上杉 それにもかかわらず、歴史家もほとんど全部最後は大学に入ってきましたね。

陸井 簡単にいってしまえば、大学卒でないということで、僕にはチャンスがなかったんでしょうね。

さっきお話したとおり、青山学院を卒業してすぐ東亜海運というところに就職したでしょう。当時は、3年制の官立の専門学校を卒業したのと4年制の私立の専門学校を出たのでは、初任給が5円か10円違って、私立のほうが下だったんです。

河村 アメリカン・スタディーズという分野は、例えば東大アカデミズムの中にはあるのですか。

新川 そういうものを考えるとすれば、地域研究の学科の存在をあげるこ



とができますね。戦後の1つの改革の結果として、教養学部教養学科が設立され、地域研究とか国際関係論、あるいは文化人類学とか、本郷にない幾つかの分野で学科がおかれることになったわけですが、東大における地域研究としてのアメリカ研究も、ここに発足したといえると思います。

河村 陸井先生の場合はアメリカ史ということになるのですか。それともアメリカン・スタディーズになるのですか。

陸井 アメリカン・スタディーズでしょうね。いろいろなことをやりましたから。

河村 かるうじて最近では外国のジャパニーズ・スタディーズが体系を持ちつつあるようなことがあって、陸井先生のアメリカン・スタディーズというのは、僕みたいな門外漢から見るとすごくユニークな感じがするのです。ジャパニーズ・スタディーズでも、専門が歴史であったり、政治であったり、思想史であったり、あるいは人類学的なことであったりするのでしょうか。先生の場合には歴史になりますか。

陸井 現代史でも、その人によって、ウエートが置かれているのが政治史であったり、経済史であったり、文化史であったりと、割に好みが分類されていますね。私の場合は、できているかどうかは別ですけども、政治、経済、両方を見たいということです。

油井 その場合、教条的なマルクス主義とは違う意味でマルクス主義的な方法を意識的に使われたことはありますか。

陸井 余りないな。(笑)

油井 ただ、政治と経済をつなぐというと、マルクス主義が1つのベースになりますね。そういう方法とか理論よりも現実の方が重要だということですか。

陸井 例えばマリー・カルドーが書いたものは、イギリス労働党の左派ぐらいの人ですが、方法としてはマルクス主義ですね。

河村 その場合のマルクス主義というのは、わかりやすくいってどういうことですか。

陸井 一言でいえばオーソドクシーなマルクス・レーニン主義、政治的にいえば共産主義運動等々を余り意識しないで、もう少し自由に考えていくということでしょうね。

油井 先生はニューレフトの評価をされるときに、ニューレフトは突然60年代にあらわれるのではなくて、1930年代の運動の蓄積があるのだということで、いろいろなところで継続性を強調されたと思うのですが、一方で、日本の左翼、特に既存の左翼の中ではニューレフトを敵対視するような考え方もありましたね。

原水禁運動なんかで、SDSとかニューレフトの代表が日本に来ていろいろ話されたと思うのですが、先生は、最初にSDSとかニューレフト的な人たちに会ったときにどういう印象を持たれましたか。

陸井 アメリカの土壌の中から出てきているものですから自由闊達だし、第一、まるで教条的でないし、そっちの方に魅力を感じました。

油井 一番最初に会ったのはいつごろで、どんな人でしたか。

陸井 さっきお話ししたスーザン・ミラーが最初です。それからトム・ヘイドンとか、ストックリー・カーマイケルとか、いろいろな人に会いました。

上杉 カーマイケルも日本に来たのですか。

陸井 カーマイケルとはストックホルムで会った。ラッセル法廷で、10日間一緒に同じホテルにいました。彼もラッセル法廷へ出てきて、サルトルとか、ボーヴォワールとか、アイザック・ドイッチャーなんかと一緒にやった。

油井 余り教条的でなくて、まず現実を重視してとにかく行動する。そのような姿勢はどこから生まれてきたのですか。

陸井 現実でしょう。教条が先にあるのではないという考え方は初めからあったと思いますね。

油井 アメリカのオールドレフトもそういう特徴があるということですか。

陸井 アメリカの場合はそうじゃないですか。さっきいったようなアプテイカーの論文なんかごらんになるとわかりますけれども、そういう点は非常に自由闊達ですよ。アメリカの場合は、レフトのオールド・アンド・ニュー、

両方ともそういう点は割に協調している。だからこそ、全部じゃないですけども、オールド・レフトのファミリーの中からニューレフトの人たちもかなり出てくる条件があったのじゃないですか。

油井 60年代になってベトナム戦争が激しくなると、オールドレフトの人たちは、いいリベラルと悪いリベラルがあって、いいリベラルとは連帯しなければいけないといった。それに対してニューレフトは、リベラル全体が戦争に加担しているという形で、リベラルの評価をめぐる対立しますね。そういう意味では非常に違っていたのじゃないですか。

陸井 それはだんだん違ってきた。あれは黒人解放運動もあれば、いろいろな要素がありますが、ベトナム反戦運動が1つの起爆剤になっているわけです。そういうところで見ると、どちらかといえば、オールドレフトを包み込んでいった方がいいという考え方だった。ニューレフトは、日本の全共闘ほどじゃないにしても、細胞分裂を繰り返すような状態にだんだんなってきたり、いろいろ問題があって、後で挫折して、ほとんどが転向しますね。その限りでは、ニューレフトは時代の一時的な産物だったということです。

河村 広い意味でのスカラシップと社会との関係で、日本とアメリカとの違いを一番感じられるのはどんな点ですか。

陸井 勉強の違いじゃないですか。それから、テニユアシップが厳しいとかね。

河村 プロフェッショナルという面で、日本のアカデミズムは少し落ちるような気がしませんか。

陸井 全体としていえば、永久就職になるという点もありますが、古在先生は、自分は、食うために幾つかの大学で教えたけれども、哲学は教えたことがない、哲学とか思想史をやると、自分が講義の準備をすることで研究しているという錯覚を起こす危険がある、だから、ドイツ語とか英語とか語学を教えるか、せいぜい原書購読をやるということだったので、僕は古在先生みたいにやっていませんけれども、大変ショックを受けました。

古在先生の晩年に割に親しくしていただいたのですが、あの人の若いころ

の勉強は物すごかったらしくて、道を歩いていて人に当たるぐらい物を考えて、家へ帰ってくると、玄関からそのまま書斎に入り込んだ。今蔵書・資料を整理している人があるそうですが、そのまま本になるような膨大なノートが残されているらしいです。

いつも古在邸に集まる思想史とか哲学をやっている若い学者たちに、プロ野球選手や大相撲力士のように真剣に勉強すれば、かなりのことはできるはずだ、ちょっと成績が悪ければ、二軍にやられたりクビにされたりする、そういう心がけでやらなきゃだめだといつもいわれていましたけれども、僕もそんなに勉強したこともないし、そういうことはやってきた人がいえることです。

アメリカの場合も、一面ではメリトクラシーだとは思いますがけれども、人気教授が給料のいいところに引き抜かれたり、地味なことをやっているのだめだったり、アメリカのある意味での商業主義みたいなものもある。

マッカーシズムでテニユアシップを次々に失っていった、この前ご紹介した『ノー・アイヴォリー・タワー』のエレン・W・シュレッカーも、学内の理事会の記録などを相当調べていますけれども、必ずしもマッカーシズムで首にされただけではないと思います。

日本の場合は、大学院生などの若い人がトレーニングなしに1次資料をいきなりやるよりも、いいものをちゃんと読み込んだ方がいいと今でも思っています。

油井 特に最近の研究者は象牙の塔にこもるような傾向が強い。陸井先生は行動する知識人でずっとやってこられたと思うのですが、行動しないではやまないような心情はどういうところから形成されたと思いますか。

陸井 一言でいえば戦争体験でしょうね。平和運動はやったが、政治運動は余りやったことはないと思います。

油井 その場合の戦争体験というのは、先生ご自身が戦争に協力するとか、そういうことではないのですか。

陸井 それではないですね。僕は戦争のとき東京で3度焼け出されて、戦



前、戦中の社会のひどさを経験していますから。

太平洋協会そのものは勝手なことをやっていたのですが、44年ごろ、満鉄、東亜研究所、日鉄の調査部が根こそぎ逮捕されたといううわさを聞いた。戦後になってわかったのですが、太平洋協会も、戦争がもう少し継続すれば根こそぎやられるはずだった。要するに、そういうものが存在すること自体当時はだめということですね。

上杉 先生は教育関係の運動にかかわったことがありますね。

陸井 あれは片手間です。56年か57年に、保谷の駅のすぐ北側に70坪の地所に家を建てて住んでいたとき、日教組の勤評闘争があった。そのときに随分頼まれて、当時は大組織でしたが、日教組の調査部にたのまれてあちこち行った。そんなかかわり合いがあって、59年か60年に保谷で革新統一候補の社会党の市長が出たときに教育委員に指名されたんです。

僕はそのとき、教育委員会で勤評内容を指定してこういうランクでつけなさい、これ以外校長に裁量させないといって、今まで密室でやっていた教育委員会の公開制を要求して、勤評を事実上骨抜きにした。文部省は嫌がったのですが、当時、保谷、国立、田無、調布の4町方式ということでやったわけです。

それから、一斉学力テストを教育委員会レベルで2年間ストップさせた。全国でも教育委員会レベルで学力テストをストップさせたのはあそこだけだったので、東大の宗像先生の調査団が調査にきたり、荒木文部大臣が乗り込んで大講演会をやったり、「保谷は無血革命成立」なんてビラを張られたりした。(笑)

その実情の視察団で学力テスト日本一の成績だということで、香川、愛媛に行ってくれといわれて、後で宗像さんと一緒にずっと回りました。そういう余技はいろいろやりましたよ。(笑)

#### 14. 国際的ネットワーク

油井 先生がベトナム戦争にかかわられる前と後で研究に変化がありましたか。

陸井 ありましたね。ガブリエル・コルコだけではなく、イギリスとかヨーロッパの人と研究グループのネットワークができて、例えばA F F Cのスポンサーをつけて、みんな書いて文章をアメリカで出版するとか、そういうことがいろいろやれるようになった。そのネットワークはいまも生きて、70年代から80年代のヨーロッパ反核運動にも続いたわけです。

ヨーロッパで、80年から82年にかけて中距離核戦力の配備で反核運動の大きな高揚がありました。あのときにもそういうコネができた。ヨーロッパの場合、E. P. トンプソンとか、あれには多くの学者も参加していますね。

河村 先生がアメリカへ最初に行かれたのは79年ですか。

陸井 78年。でも、行って見て、全く珍奇な感じはしなかった。行ったのはニューヨーク、ワシントン、ロサンゼルスだけで、全部飛行機でした。ビザを取るのが大変でしたよ。もう行くまいと思った。(笑)

油井 もうあのようなビザ発給上の思想チェックは少なくなったという話ですよ。

陸井 海外のブラックリスト名簿が二百何万人あって、4分の3消したのですが、まだかなり残っています。私はアメリカにとってよくないことばかり書いたから。

最初にビザをくれるときのお話をしたことがあると思いますが、アメリカ領事館でお年寄りの日本人のご婦人が後を追いかけてきて、呼びとめられまして、「先生のお書きになったものはこちらでかなり英訳されていて、これは、『ギルティ・バイ・アフィリエーション』じゃなくて『ギルティ・バイ・ライティングス』なんですよ」といわれたことがあって、「どうも教えていただいてありがとうございます」といったことがあります。

油井 初めてベトナムへ行かれた後だと思うのですが、今までアメリカを研究しているだけでは見えなかった視点がベトナムに行ってみると、生きた

人間の視点に立って研究しなければいけないというようなことを書かれたと思うのですが、どういう経験がもとになっているのでしょうか。

陸井 5～6人でベトナムへ行って、わずか4週間の滞在中に、社会科学院とか、経済学会とか、社会主義国のアカデミーで僕だけ4回ぐらいスピーチをやらされたんです。そのときに、例えば僕が政治の話のつもりでアメリカの政治、殊にベトナムにかかわる政治の動向について話すと、景気循環の局面について聞きたいとか、経済的にベトナム戦争をどう賄っているのか、TB（トレジャリーボンド）がどうなっているかとか、ちょっと答えようのない具体的な数字について聞かれました。

当時のベトナムは「ニューズウィーク」1冊入るのも大変な時代でしたが、同時に、どんどんアメリカ人を招待して内側から見せていましたから、そういう人が持ち込むものを見る機会はあったと思います。それから、サイゴンに入ってくるものがホー・チミン・ルートでかなりハノイに来ていたと思います。

解放戦線の幹部ともかなり会いました。彼らはみんな病気ということになっていて、北で療養していることになっているけれども、連絡に来ているに違いない。そういう人たちの前でいろいろ話をしたことがあります。毎日対峙していますし、次々に捕獲した資料なども恐らく見ていたのでしょう。じつによくアメリカを知っていました。

カメラマンの石川文洋さんが、北から南へベトナムを一周して、彼が昔撮った人たちにインタビューしているテレビ番組をきのう見たのですが、25年前に撮った女の人を探し当てた。その人は当時市場で豚肉を売っていたのですが、当時はダナンの基地の米軍の情報を探るのが私の任務だった、ダナンの基地の米軍の娼婦になって解放戦線のスパイをやっていた人も仲間にかくさんいたという話までするので、ああ、すごいなと思った。そういうことはかなり知っていたつもりだったのですが、そういうふうにしてアメリカの動きを全部見ていたんですね。

僕はハノイのある幹部に、我々でも知らないことまでアメリカのことをよ

く知っているといったら、「当たり前ですよ。毎日上に飛行機が来て物を落としてくれますから、何でもわかります」と冗談をいわれたことがあるので本当にショックを受けました。

大帝国の最も否定的で醜悪な面は植民地においてこそよくあらわるということがイギリス帝国以来いわれていますが、当時、それがベトナムに一番凝縮して出たということでしょうから、本国のアメリカを勉強していただければわからない新しい視点が開かれますね。

油井 だんだんアメリカ本国を研究する意欲が減退してしまうようなことはなかったですか。

陸井 それはないですね。

新川 それでは、お話はまだ切りがないと思いますが、一応ここまでにいたしたいと思います。

きょうは、これまでのオーラルヒストリーでお願いした方からは伺えないような話、あるいはそうした領域のことを豊富に伺うことができまして、非常に有意義かつ貴重な機会であったと思います。

陸井先生、聞き手役を引き受けてくださいました方々、皆さんに心からお礼を申し上げたいと思います。



## 年 譜

- 1918年 6月 東京市芝区白金に生まれる。10人兄弟姉妹の7番目
- 1923年 9月 1日 関東大震災
- 1925年 4月 芝白金小学校入学
- 1931年 3月 同上小学校卒業
- 1931年 4月 青山学院中等部入学
- 1934年 2月 父死去
- 1936年 3月 青山学院中等部卒業（一度は就職予定）、同 4月  
高商部入学（4年制）
- 1938年～1939年頃 清水幾太郎氏を知る
- 1940年 3月 青山学院高商部卒業
- 1940年 4月 東亜海運KK入社、同 7月退社
- 1940年 7月～1942年 5月 浪人
- 1942年 6月 太平洋協会調査局に入る
- 1943年秋 太平洋協会のアメリカ研究室（分室）研究会に加わる
- 1944年 4月 協会の中に平野義太郎氏が上田辰之助氏の協力で作った東亜學術協会に兼務
- 1945年 9月 太平洋協会解散。ただし東亜學術協会にそのまま勤務
- 1946年 9月 東亜學術協会は資金不足で消滅  
東亜學術協会のオフィスが戦後の社団法人中国研究所、財団法人世界経済研究所、国民経済研究協会などの母体となる  
同年より中国研究所に籍をおく
- 1951年 4月～1961年 9月 世界経済研究所に入る  
同研究所が1961年、アジア・アフリカ研究所に改

- 組されたのを機に辞める
- 1953年～1961年 日本文化人会議に松島栄一氏の依頼で参加。この組織は60年安保闘争で安保問題研究会（上原専禄会長）の母体となる
- 1956年春～ 原水爆禁止日本協議会に専門委員として協力
- 1959年～1961年 東京大学教養学部教養学科非常勤講師
- 1962年春 南博氏の依頼でアメリカ研究所を引受ける
- 1965年 ベトナム反戦運動に加わる
- 1966年 9月～1975年末迄 ベトナムにおける戦争犯罪調査委の結成に加わり、まもなく事務局長
- そのかわりで1966年12月～1967年1月、1969年11月～12月、1972年5月～6月、北ベトナムを訪問
- 1966年～1973年 アメリカ研究所の創立者芳賀武氏が病氣辞任のため、所長を引受け、資金不足で1973年に解散するまで続ける
- 1967年～1984年 ベトナム平和、軍縮、開発などの問題でパリ、ストックホルム、フランクフルト、ジュネーブ、ロンドン、レディング、コペンハーゲン、ニューヨーク、ニューデリー、マルタ島その他などの集会、セミナー、討論などに20～25回ほど参加
- 1968年頃～10余年間 自宅で私設ゼミ
- 1969年～1973年 法政大学社会学部の一部、二部の非常勤講師
- 1977年～1984年 原水爆禁止運動の統一組織で代表委員
- 以降現在まで自営

## I 著書・編著

- 『原子力問題事典』(陸井三郎他編) 福音館 1955年  
『社会主義対資本主義—米ソ角逐する現代史—』 光文社 1958年  
『技術的進歩と資本主義』 三一書房 1960年  
『現代のアメリカ—その病理と課題—』 三一書房 1964年  
『キューバからベトナムへ—アメリカの侵略工作—』(岡倉古志郎と  
共編著) 新日本出版社 1965年  
『ベトナム戦争と労働運動』(岡倉古志郎・坂本徳松と共著) 労働旬報社  
1966年  
『現代アメリカの亀裂—ベトナム・黒人問題・暗殺—』 平和書房  
1968年  
『資料・ベトナム戦争』上・下(編著) 紀伊國屋書店 1969年  
『ゆらぐドル帝国』 学習の友社 1971年  
『インドシナ戦争』 勁草書房 1971年  
『大国と第三世界—崩れる力による支配—』 日本経済新聞社 1974年  
『アメリカの権力—可能性と限界—』 すすさわ書店 1976年  
『デタント—反革命世界戦略—』 すすさわ書店 1976年  
『ハノイでアメリカを考える』 すすさわ書店 1976年  
『アメリカの核・エネルギー戦略』 東研 1977年  
『現代世界を考える』 三省堂 1978年  
『アメリカと現代世界』 東研 1978年  
『核で核は防げるか』(編著) 三省堂 1982年  
『ハリウッドとマッカーシズム』 筑摩書房 1990年

## II 訳書

- E. H. ノーマン『日本における兵士と農民』 白日書院 1947年  
オーエン・ラティモア『アメリカの審判』 みすず書房 1951年  
E. ブラムシュテット『独裁と秘密警察—恐怖による支配の技術—』

- みすず書房 1951年
- シカゴ新報編『ヒステリー・エージ』 月曜書房 1952年
- ヴェブレン『有閑階級論』〔ほか〕『世界大思想全集』(第2期) 社会・宗教  
・科学思想編 第17 河出書房 1953年
- ニム・ウェールズ編『紅い塵—新中国の革命家たち—』上 新評論社  
1953年
- E.H.S. バーホップ『原子力の挑戦』 中央公論社 1955年
- 『ソビエトの原子力』(陸井三郎・野中昌夫編訳) 三一書房 1955年
- ハーバート・フェイス『真珠湾への道』(共訳) みすず書房 1956年
- A. アンゲロポウロス『原子力と現代史』 平凡社 1956年
- S. リリー『オートメーションの経済学』(編訳) 青木書店 1957年
- A. クラミッシュ, E.M. ザッカート共著『原子力と産業』 紀伊國屋書店  
1959年
- C.F. カーター, B. R. ウィリアムズ『技術革新と投資』 紀伊國屋書店  
1960年
- ヘレン・アルフレッド『社会主義とはなにか』 三一書房 1961年
- ハーバート・アップセーカー『C・ライト・ミルズの世界』 青木書店  
1962年
- ウォルター・アダムス, ホレイス・M. グレイ『アメリカの独占』  
至誠堂 1965年
- ジャック・ベルデン『中国は世界をゆるがす』上・中・下(共訳)  
青木書店 1965年
- 『世紀の大論戦—アメリカ上院外交委員会ベトナム問題公聴会議事録—』  
(アメリカ研究所編訳) 三一書房 1966年
- シドニー・レンズ『アメリカのラディカリズム』(共訳) 青木書店  
1966年
- H. リューマー『アメリカ貧乏物語』(共訳) 青木書店 1966年
- I. F. ストーン『危険なアメリカ』 徳間書店 1966年



- D. W. コンデ『絶望のアメリカ』（共訳） 徳間書店 1967年  
ウィリアム・ルクテンバーグ『ローズヴェルト』 紀伊國屋書店 1968年  
D.W.コンデ『アメリカは何をしたか2 朝鮮戦争の歴史, 1950～1953』  
上・下（監訳） 大平出版社 1967～1968年  
N. カッツ『幻想のアメリカ』 ダイヤモンド社 1971年  
ウィリアム・ドムホフ『現代アメリカを支配するもの』 毎日新聞社  
1971年  
『ベトナム帰還兵の証言』（編訳） 岩波書店 1973年  
チャールズ・フェン『ホー・チ・ミン伝』上・下 岩波書店 1974年  
ジョイス・コルコ『世界資本主義の危機』上・下 岩波書店 1975年  
マリー・カルドー『戦争論と現代—核爆弾の政治経済学—』 社会思想社  
1986年  
ジョイス・コルコ『世紀末恐慌と世界経済【リストラクチャリング・プロセス】』 社会思想社 1989年  
ガブリエル・コルコ『ベトナム戦争全史』（監訳） 社会思想社  
1992年（近刊）

### Ⅲ. 論文・書評その他

1948年

- アメリカに於ける東亜研究者の系譜 中国研究所編『アメリカの新アジア  
観』 潮流社版 1948年5月

1952年

- ラティモアの政治的立場と著作 『出版ニュース』205号  
自由の国の不自由—支配階級と弾圧法規 『改造』33巻14号  
〔翻訳〕オーエン・ラティモア「内陸アジア史の諸論点」（『中国の内陸アジ  
ア边境』 第2版1951年版序文） 『中国研究』15号

原爆をめぐる対立の激化 『三田新聞』698号 11月20日

アメリカ進歩党の現状—平和のための統一戦線の結成 『世界』12月号

#### 1953年

「自由」世界の秘密警察 『改造』34巻6号

自壊するニュー・ディーラー 『京都大学新聞』678・679合併号

1月1日

アイゼンハワー政権は日本をどう変えるか 『東京大学新聞』145号

2月5日

ホワイト事件 『京都大学新聞』726・727合併号 11月30日

#### 1954年

マッカーズムの行方 『三田新聞』722号 1月10日

軍事顧問団 『中央公論』5月号

米原子力法改正の意味するもの 『エコノミスト』9月18日号

#### 1955年

原子力植民地主義と原子力平和利用競争 『世界と日本』20号

積極的な発言を欠く——外交問題をめぐって（4月号の雑誌論文から）

『朝日新聞』（朝刊）3月24日

〔書評〕F. アレン著『20世紀アメリカ社会史』, サザーランド著『ホワイト

トカラーの犯罪』 『日本読書新聞』802号 6月20日

原子戦争をはばむ道 『日本読書新聞』808号 8月1日

政治を大衆のものに——政治評論のさまざまなタイプ 『朝日新聞』

（朝刊）11月9日

#### 1956年

風雲を呼ぶ中近東 『知性』3巻1号

進展阻む軍事経済 『東京大学新聞』 269号 8月13日  
各国共産党の動き 『中央公論』 9月号  
高まる軍備縮小の機運 『エコノミスト』 34巻31号  
アメリカに於ける原子力発電と電気資本 『経済評論』 5巻7号  
〔書評〕 H. マトゥソウ著, 樋口稔訳『偽証』 『日本読書新聞』 869号  
10月8日

1957年

死までノーマンを追いやったもの 『図書新聞』 4月13日号  
〔書評〕 ダンヴァンボート著, 関嘉彦・白石四郎訳『人間の尊厳』 『日本  
読書新聞』 899号 5月13日  
強まる原子・誘導兵器装備 『エコノミスト』 5月23日号  
マッカーシズムの系譜 『世界』 138号  
ノーマンの死とその背景 『中央公論』 8月号  
潜在的な大国から顕在的な大国へ——アメリカのアジア政策 『総合』 5号  
〔書評〕 H. オーコンナー著, 佐藤定幸訳『石油帝国』 『日本読書新聞』  
915号 9月2日  
軍事評論という怪物——流行の正体は何か 『日本読書新聞』 919号  
9月30日  
技術革新と都市労働者 『都市問題』 48巻11号  
国際原子力資本の系譜①～④ 『エコノミスト』 11月16日, 23日, 30日,  
12月7日号  
変容する米国の防衛産業 『エコノミスト』 11月26日号  
経営学ブームの効用, 上・下 『東京新聞』 9月6日, 7日

1959年

〔書評〕 末永陸甫著『戦後アメリカ資本主義の分析』 『日本読書新聞』  
984号 1月12日

〔座談会〕米国外交変化の条件（佐藤定幸・中林賢二郎と）

『エコノミスト』1月17日号

〔座談会〕アメリカは転換するか 『エコノミスト』37巻3号

米ソ経済競争の現状と展望 『世界経済年報』第10集

科学技術競争, 1959年アメリカの立場 『世界情勢旬報』382号~383号

〔書評〕瀬長亀次郎著『沖縄からの報告』 『日本読書新聞』1014号

8月10日

ラテン・アメリカの情勢 『世界情勢旬報』402号

米ソ首脳の交換訪問とアメリカ 『世界情勢旬報』408号

## 1960年

あたらしい時代と世界とアメリカ 『世界経済情報』1月上旬・下旬号

東西首脳会談と軍縮問題 『世界経済情報』4月上旬号

〔図説〕軍備の重荷 『世界』6月号

アメリカはどこへ行く 『世界経済情報』9月上旬号

〔書評〕F. ニーベル, C. ベイリー著, 笹川正博・杉淵玲子訳『もはや高

地なし—ヒロシマ原爆投下の秘密—』 『日本読書新聞』1078号

11月7日

ケネディ・ブレーンの条件 『日本読書新聞』1080号 11月21日

ケネディ大統領とアメリカの政策 『世界経済情報』11月下旬号

モスクワ声明と世界情勢 『世界経済情報』12月上旬・下旬号

## 1962年

〔座談会〕ケネディ政権の二年目（蠟山芳郎・山本進と）

『エコノミスト』2月20日号

国連軍縮報告の背後にあるもの 『エコノミスト』5月15日号

〔書評〕板垣与一著『アジアの民族主義と経済発展』 『エコノミスト』

7月10日号

〔書評〕 田口憲一著『大企業は暗躍する』 『エコノミスト』 7月31日号

1963年

〔書評〕 アーノルド・トインビー著，黒沢英二訳『失われた自由の国』

『エコノミスト』 1月15日号

軍縮とその経済的諸側面 『国際問題』 36号

〔書評〕 ハーバート・アプセーカー著『アメリカの外交政策と冷たい戦争』

『エコノミスト』 4月16日号

〔時評〕 ケネディの援助政策 『月刊アジア・アフリカ研究』 5月号

前進する米国の黒人解放とその経済的背景 『エコノミスト』 9月3日号

〔書評〕 ガブリエル・コルコ著，佐藤定幸訳『アメリカにおける富と権力』

『エコノミスト』 9月24日号

豊かな社会の矛盾 『エコノミスト』 秋季別冊号

〔時評〕 大統領の暗殺とアメリカのA・A政策 『月刊アジア・アフリカ研究』 12月号

ケネディ路線の次にくるもの 『エコノミスト』 12月3日

1963年の世界情勢——キューバ危機を手掛りとして

『銀行労働調査月報』 147号

1964年

ケネディ暗殺の背景 『現代の眼』 1月号

反逆するアメリカ——秘密結社 『現代の眼』 3月号

ミステリー・オブ・アメリカ 『現代の眼』 4月号

〔時評〕 当面のニグロ解放闘争における諸論点 『月刊アジア・アフリカ研究』 7月号

アメリカにおけるニグロ解放闘争と労働者階級 『経済』 9号

〔書評〕 アレン・ドルーリ著，川口正吉訳『アメリカ政治の内幕』

『エコノミスト』 6月16日号



〔書評〕 岡倉古志郎・蠟山芳郎編著『新植民地主義』 『エコノミスト』

9月29日号

オズワルドは二度殺された 『現代の眼』 12月号

〔書評〕 L. E. ローマックス著, 山田進一訳『黒人革命』

『エコノミスト』 12月8日号

〔時評〕 ジョンソン政権の1年間と今後について 『月刊アジア

・アフリカ研究』 12月号

### 1965年

〔座談会〕 米原子力潜水艦「寄港」問題と科学者の立場 『文化評論』

3月号

胎動するアメリカ労働運動——1930年代は再現するか 『エコノミスト』

3月9日号

アメリカとベトナム——ジョンソン政権を“支える”もの

『エコノミスト』 43巻15号

日韓問題とベトナム戦争をつなぐもの 『日本』 8巻5号

激動するアメリカ労働運動 『労働経済旬報』 610号

ペンタゴンの挑戦 『現代の眼』 6月号

アメリカ政治の異常事態 『日本』 8巻9号

〈研究〉 アメリカにおける反戦闘争の実態と性格 『月刊アジア

・アフリカ研究』 10月号

アメリカと朴政権の役割 『日韓問題』(緊急特集版) 10月10日

〔翻訳〕 合衆国陸軍地域別ハンドブック日本編, アメリカ軍部の対日特殊  
研究(田中勇と共訳) 『日本』 10月号

### 1966年

〔翻訳〕 I. F. ストーン「日誌・ベトナム戦争批判」 『日本』 2月号

〔書評〕 W. E. B. デュボア著, 木島始訳 『黒人のたましい』

『月刊アジア・アフリカ研究』 2月号

アメリカ知識人の反戦運動とその背景 『歴史評論』 186号

〔書評〕 神谷不二著『朝鮮戦争—米中対立の原型—』 『月刊アジア・アフリカ研究』 3月号

ジョンソン教書とアメリカ経済 『経済』 23号

アメリカのベトナム反戦運動 『東京大学新聞』 651号 4月11日

〔翻訳〕 ベトナム問題・米上院公聴会議事録（陸井三郎訳編）

『現代の眼』 5月号

アメリカは中国政策を変えるか——現状維持派ゆさぶる内外の圧力

『エコノミスト』 5月31日号

アメリカ社会の「安定」の崩壊と背景——反戦運動の現状と展望

『経済評論』 15巻7号

極右・ウェルチの存在理由 『日本』 9巻3号

〔書評〕 マーチン・ルーサー・キング著，中島和子・吉川博己訳『黒人はなぜ待てないか』 『エコノミスト』 6月7日号

アメリカ帝国主義の侵略的本質とたかまる反戦運動 『労働経済旬報』 610号

アメリカ帝国主義研究のための文献の紹介 『経済』 30号

瑣末主義と「現実主義」〈論壇回顧——1966年・国際〉 『エコノミスト』 12月27日号

1967年

アメリカにおける学問の自主性，“学園の叛乱”，軍事研究

『日本の科学者』 1巻5号

北爆下の国を見て——ベトナム人の微笑と信念 『エコノミスト』

2月14日号

戦場ハノイからの報告 『現代の眼』 3月号

「戦略村」とたたかう南ベトナム人民 『経済』 35号

国際戦争犯罪法廷の背景——各国にみるベトナム反戦の論理 『エコノミスト』 5月30日号

西欧の知識人と反戦運動 『学生新聞』 6月28日号

〔証言〕ねらいは人身破壊だ 『現代の眼』 7月号

ストックホルム法廷の論理 『現代の眼』 7月号

ベトナムにおける戦争犯罪国際法廷の意義 『教育評論』 203号

〔書評〕ハイマン・リューマー著『アメリカ経済はどこへゆく』 『エコノミスト』 8月10日号

東京法廷 『労働経済旬報』 9月21日号

ラッセル法廷——東京からコペンハーゲンへ 『現代の眼』 11月号

乏しい全体的把握〈論壇回顧——1967年・国際〉 『エコノミスト』  
12月26日号

#### 1968年

〔時評〕情勢に強いられたジョンソン提案 『月刊アジア・アフリカ研究』  
4月号

ベトナムに揺れる米国政界 『エコノミスト』 4月2日

〔座談会〕ベトナム新情勢をどうみるか——内外の矛盾深まる米国（蠟山  
芳郎・斉藤孝・清水知久と） 『エコノミスト』 4月16日号

アメリカ・ブラックパワー——その背景と論理 『エコノミスト』  
4月23日号

平和憲法と民族基本権 『教育評論』 215号

アメリカ革命の展望——アメリカの新ラディカリズムと黒人の解放  
『現代の眼』 6月号

この異常なアメリカ——ケネディ暗殺の意味するもの 『エコノミスト』  
6月18日号

アメリカのパリ会談戦略とその成否 『月刊アジア・アフリカ研究』 7月号

アメリカ社会の全層的分裂 『経済評論』 17巻9号

- [対談] 米国は手術不能の肥満児だ (田英夫と) 『宝石』 8月号  
[書評] 奥源造著『米国への警鐘』 『エコノミスト』 9月24日号  
[時評] ニクソンの当選と今後の内外政策 『月刊アジア・アフリカ研究』  
11月号  
[座談会] これからのベトナムと世界——北爆全面停止がもたらすもの  
(清水知久・北島霞と) 『エコノミスト』 11月12日号  
ニクソン——人と政策 『エコノミスト』 11月19日号  
最近のアメリカ労働運動 『経済』 56号

1969年

世界経済研究所のころ 『岡倉古志郎国際政治論集 第3巻』 勁草書房

1969年1月

- [座談会] 激動する内外情勢と「70年問題」の展望 (岡倉古志郎  
・川端治と) 『経済』 57号  
ニクソン新政権の性格と限界——反映するアメリカの体制的危機  
『エコノミスト』 1月7日号  
パリとジュネーブの間——二つのベトナム和平会談を解剖する  
(上)・(下) 『エコノミスト』 4月22日号・29日号  
ニクソンのベトナム和平計画 『エコノミスト』 5月27日号  
[時評] ニクソン政権のベトナム政策 『月刊アジア・アフリカ研究』  
6月号  
[書評] ブルッキングス研究所編, 朝日新聞外報部訳『アメリカは何をなす  
べきか』 『エコノミスト』 6月17日号  
[翻訳] G. コルコ「ベトナムにおけるアメリカ, 1969年——ニクソンに残  
された時間は少ない」 『エコノミスト』 8月19日号  
出口のない内外戦略——軍拡と国内計画縮減の矛盾 『エコノミスト』  
10月10日臨時増刊号  
米国のポリシーメーカーのアジア戦略——前途多難な「ベトナム以後」

『エコノミスト』10月25日臨時増刊号  
〈今月の訪問〉陸井三郎アメリカ研究所長に聞く 『前衛』11月号  
もう一つのアメリカ 『文化評論』12月号

## 1970年

[解説] ミューズ著, 志賀潔他訳『アメリカの黒人革命』 弥生書房  
見てきた北ベトナム(1)～(8) 『エコノミスト』1月13日号～3月  
17日号  
[書評] アーサー・シュレジンガー・ジュニア著, 大前正臣訳『信頼の崩  
壊』 『読書の友』358号  
日本人は“黄色い白人”なのか 『アサヒグラフ』2月6日号  
ベトナム民主共和国におけるアメリカの戦争犯罪の調査 『法律時報』  
42巻6号  
私のレーニン発見 『文化評論』5月号  
インドシナ介入の論理と破綻 『エコノミスト』5月19日号  
〈資料〉「日本の軍国主義復活」について 米下院外交委員会アジア調査団  
報告(4月22日, 日本・沖縄の項全訳) 『エコノミスト』5月26日号  
〈紹介〉W. J. ポメロイ著『アメリカの新植民地主義』 『月刊アジア  
・アフリカ研究』7月号  
ニクソン提案は和平の契機になるか 『エコノミスト』10月20日号  
[翻訳] グェン・マイ「ベトナムにおけるゲーティン・ソビエト運動,  
1930—31年」 『歴史学研究』366号  
ベトナムにおけるアメリカ研究について 『歴史学研究』366号

## 1971年

「ニクソン・ドクトリン」とアメリカの対外政策 『月刊アジア  
・アフリカ研究』1月号  
アメリカとインドシナ(上)・(下) 『エコノミスト』2月23日号,



3月2日号

〔書評〕タンゼント・フープス著、丸山静雄訳『アメリカの挫折—インドシナへの介入とその限界—』 『朝日アジアレビュー』 3月号

〔座談会〕ラオス侵攻の破綻とインドシナ情勢の展開（岡倉古志郎・鈴木正四・寺本光朗・吉沢南と） 『月刊アジア・アフリカ研究』 4月号

〔座談会〕米中接近の可能性をさぐる（蠟山芳郎・石塚俊二郎と） 『エコノミスト』 4月27日号

カリー裁判の真相は隠されている 『現代』 6月号

ベトナム機密文書——タイムズ・ポスト報道の背景(上)・(中)・(下)

『読売新聞』(夕刊) 6月22, 23, 24日

ベトナム秘密文書暴露の知られざる事情——米国の「リベラル」の立場と今後の展望 『月刊エコノミスト』 8月号

「マクナマラ文書」の性格 『文化評論』 9月号

ニクソン訪中決定をめぐって 『月刊アジア・アフリカ研究』 9月号

二つの衝撃で米国は立直るか 『エコノミスト』 9月14日

キッシンジャーの軌跡——限定戦争論から中国接近政策まで 『時代』 10月号

“The Balang An Massacre,” in Crimes of War, ed. by Richard A. Falk, Gabriel Kolko, and Robert Jay Lifton, New York: Random House, 1971, 590pp.

アメリカ世界政策の破綻 『世界』 10月号

〔翻訳〕ガブリエル・コルコ「ベトナムからの撤退は幻想」 『エコノミスト』 10月12日号

1972年

激動する世界と日本の進路 『教育評論』 269号

米中に「平和共存」時代はくるか——国家利益が回転軸に

『エコノミスト』 3月7日号

〔座談会〕上海声明が歴史に刻むもの（蠟山芳郎・野村浩一と）

『エコノミスト』3月14日号

〔翻訳〕ガブリエル・コルコ「幻想のなかの米軍撤退」 『エコノミスト』

5月2日号

ニクソン強硬策の思惑 『エコノミスト』5月23日号

ハノイ報告（1）～（4） 『エコノミスト』7月4, 11, 18, 25日号

〔討論〕日中接近の政治学（野村浩一・斉藤孝・関寛治・山極晃と）

『エコノミスト』9月5日号

北ベトナムでアメリカを考える 『中央公論』10月号

日中打開以後のアジア——共存の道はひらけるか 『エコノミスト』

10月10日号

〔対談〕民族自決の原理（木村哲三郎と） 『朝日ジャーナル』11月10日号

## 1973年

アメリカはベトナムから手を引くか 『週刊東洋経済』1月6日号

暗いニクソン新政権の前途 『エコノミスト』1月16日号

〔座談会〕ベトナム戦争とは何であったか（寺沢一・山極晃・日野啓三・

山室英男と） 『東洋経済』2月10日号

「徹底抗戦」を支えた豊かな心 『アサヒグラフ』2月20日号

独裁者ニクソンの終わりなき冒険 『現代』3月号

〔翻訳〕ガブリエル・コルコ「アメリカの神話とその敗北」 『世界』3月号

財界がねらうベトナムへの思惑 『エコノミスト』3月6日号

ベトナム復興計画の論理と背理——ニクソン・キッシンジャーのインドシ

ナ復興援助戦略に関連して 『週刊東洋経済』3月31日号

人間の尊厳とベトナム人民の権利 『現代と思想』11月号

（報告）アメリカの戦争犯罪行為 『世界』4月号

〔対談〕ベトナム協定の思想（芝田進午と） 『文化評論』4月号

「キッシンジャーとヴェトナム」岡倉古志郎・江口朴郎監修 『70年代の

- アジア』(全4巻)特集号 時事通信社 1973年5月
- [時評] ベトナム協定以後のアメリカのインドシナ戦略について 『月刊  
アジア・アフリカ研究』5月号
- しぶとくあくどいニクソン外交の手口 『週刊サンケイ』臨時増刊  
5月7日号
- [書評] ジャン・ピエール・デブリ, アンドレ・マンラ著『わが告発——  
南ベトナム政治囚を救え!』 『サンデー毎日』7月1日号
- 幻想と矛盾のベトナム停戦 『財界展望』7月1日臨時増刊号
- ベトナム停戦の筋書き——ハンチントン・レポート 『中央公論』7月号
- <資料> 南ベトナムにおける政治闘争にそなえて—ハンチントン・  
レポート 同上
- [討論] 戦後日米関係の終焉(長洲一二・金森久雄・清水知久と) 『エコ  
ノミスト』7月17日号
- 日本, ハノイと国交樹立 『エコノミスト』10月9日
- [書評] ダニエル・エルズバーグ著, 梶谷善久訳『ベトナム戦争報告』  
『サンデー毎日』10月14日号
- “カンボジア以後”のインドシナ展望 『アジア』11月号
- [翻訳] ガブリエル・コルコ「20世紀アメリカにおける権力」  
『現代と思想』14号

## 1974年

- 現代アメリカ研究とペンタゴン・ペーパーズ 『歴史評論』235号
- [書評] ステファン・グローバード著『キッシンジャー』  
『エコノミスト』1月29日号
- [翻訳] ガブリエル・コルコ「安定度増す南ベトナム解放区」  
『エコノミスト』2月12日号
- インド洋緊迫の裏に何があるか 『エコノミスト』4月2日号
- [翻訳] ガブリエル・コルコ「サイゴン政権への新しいテコ入れ」

- 『週刊東洋経済』 4月13日号  
北ベトナム——独自の民主的自由 『アジア』 6月号  
〔書評〕 オリアーナ・ファラーチ著，河島英昭訳『愛と死の戦場』  
『サンデー毎日』 6月2日号  
外国語上達のプロセス 『毎日新聞』（夕刊，学芸欄） 6月8日  
ロッキードが墮落したとき——バスに乗り遅れた国際企業の運命  
『エコノミスト』 6月25日号  
〔対談〕 狂相「世界大乱」の点と線を結ぶ（サム・ニューモフと）  
『現代』 7月号  
〔書評〕 川本邦衛編『南ベトナム政治犯の証言』 『サンデー毎日』  
7月28日号  
アメリカ・デモクラシー 『北海道新聞・東京新聞・中日新聞・西日本  
新聞連合』 8月12日  
ニクソンを追放した米大資本の恐るべき権力闘争 『週刊読売』（増大号）  
8月24日号  
キッシンジャー外交は生き残るか 『週刊東洋経済』 8月24日号  
ああ，アメリカン・デモクラシー！！ 『サンデー毎日』（緊急増大号）  
8月30日号  
一つの時代が終わった——敗退したニクソン・キッシンジャー外交  
『朝日ジャーナル』（臨時増刊号） 9月1日号  
フォード政権とアメリカ財界 『週刊東洋経済』 10月5日号  
国防総省をリードする財界 『エコノミスト』 10月29日号  
“The World Bank and Asian Development Bank Project in propping up  
the Saigon Regime,” in World Bank and Saigon, October, 1974,  
The American Friend Service Committee.  
世界恐慌に「王朝」はどう対処するか 『現代』 11月号  
ラロック証言が語る米の世界戦略——誇示された核の優越性と日本  
『エコノミスト』 11月12日号

〔書評〕カール・バーンスタイン、ボブ・ウッドワード著『大統領の陰謀』

『サンデー毎日』12月1日号

極東戦略に乗り出したフォード 『エコノミスト』12月3日号

外国人との付き合いと語学——鎖国はまだ解けていない 『毎日新聞』

(夕刊, 学芸欄) 12月7日

## 1975年

米ソ首脳会談の意味するもの 『世界政経』1月号

〔書評〕ロバート・モス著『アジェンダの実験』 『サンデー毎日』

2月23日号

デタントによる世界秩序は崩れた 『エコノミスト』4月8日号

最終局面を迎えるベトナム30年戦争 『毎日新聞』(夕刊, 学芸欄)

4月11日

〔対談〕大流動の時代はじまる——再編成期迎えた国際環境(中島嶺雄と)

『朝日ジャーナル』4月18日号

30年戦争の終局とベトナム人の心 『読売新聞』(夕刊, 文化欄) 4月18日

〔座談会〕日本が外交モラルを示す時(木村俊夫・武者小路公秀・小山内

宏と) 『読売新聞』5月2日

〔座談会〕アジアの激変と米中ソの対応——民族解放と社会主義の間

(山本満・菊地昌典と) 『エコノミスト』5月20日号

〔報告〕分断国家と大国(シンポジウム・アジアの分断国家と平和)

『朝日アジアレビュー』6巻2号

ベトナムの“難民”問題とは何か 『世界』6月号

世界史の中のベトナム革命(覚え書) 『経済評論』24巻7号

ベトナムの完全勝利とアメリカの戦略・政策 『月刊アジア

・アフリカ研究』7月号

揺れ動いたクオリティ・ペーパーズ 『時事英語研究』8月号

核科学崇拜主義 『毎日新聞』(夕刊, 学芸欄) 8月20日



外に晴れぬC I A, ロックフェラー委員会報告 『読売新聞』(朝刊)

8月25日

本当の“ベトナム戦争”はこれから始まる 『月刊日本』9月号

本多勝一の論理〈解説と補遺〉 本多勝一著 『続・ベトナム戦争』

すずさわ書店 1975年9月

〔書評〕ロックフェラー委員会, 毎日新聞外信部訳『C I A』 『エコノミ

スト』9月9日号

米国のアジア戦略と日本外交 『季刊世界政経』10月

アメリカ資本主義と科学技術——国家・多国籍企業・テクノロジー

『科学と思想』18号

〔座談会〕世界史のなかのベトナム戦争(江口朴郎・関寛治・津田達夫と)

『現代と思想』22号

フォード訪中にみる米国戦略 『エコノミスト』12月16日

## 1976年

アジアの制圧を図るメジャー——中国, ベトナムはどう対処する 『エコ

ノミスト』2月10日号

多国籍犯罪の内幕 『エコノミスト』2月24日号

いく層にも引き裂かれた社会 『時事英語研究』3月号

〔座談会〕アメリカの矛盾と混迷(山本進・菊住昌一と) 同上

ロッキードという政治爆弾——軍産複合体の悪循環を断つには 『エコノ

ミスト』(3月29日臨時増刊号)

米国の多国籍犯罪——その動態 『世界』4月号

〔座談会〕戦後日本の政治とロッキード問題 『日本の科学者』11巻7号

〔対談〕アメリカの歴史と思想(河村望と) 『現代と思想』25号

〔座談会〕毛沢東主席の死と世界——文革路線は変わるか(小島麗逸

・矢吹晋と) 『エコノミスト』9月21日号

カーターの支持基盤を探る——共和党から乗り換えた米財界主流 『エコノ

ミスト』11月2日号

〔書評〕H. キッシンジャー著，伊藤幸雄訳『回復された世界平和』

『エコノミスト』11月9日号

## 1977年

アメリカの直面する情勢と課題 『世界週報』1月18日号

〔座談会〕『トンニャット・ベトナム』をめぐって 『シネ・フロント』

4月号

再建ベトナムと欧米知識人 『読売新聞』（夕刊，文化欄）5月23日

“A dog on the hay” 『ハーバート・ノーマン全集』第2巻・月報2

岩波書店 1977年6月

米核戦略にひそむ危険な決意——愚かな神話に踊る日本 『エコノミス

ト』7月5日号

核兵器開発はここまで来た 『世界』8月号

〔座談会〕アメリカの強さと弱さ——多面的な再統合の力（富塚文太郎・

清水知久と） 『エコノミスト』10月20日臨時増刊号

〔座談会〕原水爆禁止運動の新たな高揚にむけて（古在由重・北川隆吉と）

『日本の科学者』12巻11号

## 1978年

〔座談会〕戦後世界と平和運動を考える——核兵器廃絶を中心にして（平

野義太郎他と） 『科学と思想』27号 1月

カーター政権と第三世界 『月刊アジア・アフリカ研究』1月号

カーター，霧のなかの二年目——“消耗品”の静かな対応力 『エコノミ

スト』1月31日号

石油資源はなくなるらない 『文芸春秋』2月号

ベトナム戦争とアメリカ アジア・アフリカ研究所編『ベトナム』下巻

水曜社 1978年3月

- 世界を動かし始めたNGO運動 『新聞研究』324号  
アメリカの核戦略と日本の原子力問題 『日本の科学者』13巻7号  
もう一つのアメリカ——NGOの一員としての帝国初見 『エコノミスト』8月1日号  
〔対談〕核兵器完全禁止への道（バーナード・フェルトと） 『朝日新聞』（朝刊）8月5日  
〔座談会〕アジアにおける民族・社会主義・国家について——ベトナム・中国問題を検討する（菊地昌典・今川英一と） 『エコノミスト』9月5日号  
アメリカは何をねらっているか——資源問題から見た日米関係とアジア 『朝日ジャーナル』9月25日臨時増刊号

#### 1979年

- 中越戦争、その衝撃とアジアへの波紋（関寛治、辻康吾、今川英一と） 『エコノミスト』3月6日号  
反革命世界戦略“デタント”と中国外交 『現代と思想』35号  
〔対談〕骨肉相食む中・越の論理——社会主義国間闘争の背景をさぐる（田所竹彦と） 『朝日ジャーナル』3月16日号  
〔座談会〕『ディア・ハンターをめぐって』（山田和夫・芝田進午と） 『シネ・フロント』4月号  
〔翻訳〕ガブリエル・コルコ「知性と統合——合衆国における資本主義合理化の神話」 『現代と思想』36号  
〔解説〕ロバート・C・オールドリッジ著、山下史訳『先制第一撃——アメリカ核戦略の全貌——』 TBSブリタニカ 1979年6月  
中国——放置できないアジアの真空 『エコノミスト』6月19日号  
アメリカのエネルギー政策 『季刊世界政経』71号  
米国戦略の矛盾を衝く——世界を揺るがす石油断交 『エコノミスト』12月4日号

1980年

アメリカ帝国主義はどこへ行ったか 『月刊アジア』 3月号

〔座談会〕 怖さがのぞくアメリカの右旋回（徳山二郎・袖井林二郎と）

『週刊東洋経済』 3月1日号

《読書ノート》 核時代に生き残るための思想 『現代と思想』 39号（3月）

米国経済の軍事化を吟味する——追加軍拡の効果と報酬 『エコノミスト』 4月1日号

『ガリレイの生涯』 とヒロシマ 『朝日新聞』（夕刊，文化欄） 4月9日

〔対談〕 核兵器完全禁止への道（ジョゼフ・ロートブラットと） 『朝日新聞』（朝刊） 8月3日

「軍事バランス」という名の元凶——核競争の思想を生むメカニズム

『エコノミスト』 11月20日臨時増刊号

1981年

〔書評〕 岡崎次郎編集代表『現代マルクス＝レーニン主義事典』 全3巻

『週刊読書人』 1月26日号

ミルズ著『第三次世界戦争の諸原因』 を読みなおす 『思想の科学』 128号

“近代化”の課題とインドシナ諸国 『月刊アジア』 2月号

戦中・戦争直後の平野先生『平野義太郎一人と学問』 大月書店

1981年2月

中東に向けたレーガンの未知の顔——選択の余地はあまりにも少ない

『エコノミスト』 2月3日号

米原潜事故にみるズサンな核管理——狂気の核軍拡を阻止できるか

『エコノミスト』 5月19日号

非核に独自の論理を〔東西軍事力第4部・専門家に聞く（12）〕

『毎日新聞』（朝刊） 6月16日

レーガンの核軍拡路線と中国——“唯一の加爆国” 米国に抗議する





1984年

レーガン政策の“ある崩壊”——ハート現象とどう交錯する 『エコノミスト』 3月20日号

ジョゼフ・マッカーシー 猿谷要・城山三郎・常磐新平編『大戦の時代』  
〔人物アメリカ史・第6巻〕 集英社 1984年11月

〔書評〕坂井昭夫著『軍拡経済の構図』 『エコノミスト』11月27日号

1985年

〔書評〕清水知久著『ベトナム戦争の時代』 『エコノミスト』10月29日号

1986年

アキノ新政権下で和解はつづくか——土地改革と軍事協定が当面の課題  
『エコノミスト』6月17日号

“若い日の私” 『毎日新聞』（朝刊）7月5日

1988年

ベトナム戦争とキッシンジャー戦略 ベトナム戦争の記録編集委員会編  
『ベトナム戦争の記録』 大月書店 1988年12月

〔書評〕芳賀武『紐育ラプソディ』 『エコノミスト』1月28日号

〔書評〕マリー・カルドー著、芝生瑞和・柴田郁子訳『兵器と文明』  
『エコノミスト』5月20日号

〔解説〕芳賀武著『ニューヨーク遊民団』 PMC出版 1988年10月

1989年

秘録 マッカーシズム——40年目の真実①～⑫ 『エコノミスト』  
4月～7月

① “ハリウッド・テン” と呼ばれる人々 4月11日号

② 孤立無援の“異端審問” への道 4月18日号

- |                        |        |
|------------------------|--------|
| ③ “不服従” の名をもらった男       | 4月25日号 |
| ④ 迫り来る「人類危機」をいち早く予感    | 5月16日号 |
| ⑤ “われら19人” 旧友たちにあいさつを! | 5月23日号 |
| ⑥ アイスラー一家の愛と相克         | 5月30日号 |
| ⑦ 何が二人の親友を訣別させたか       | 6月6日号  |
| ⑧ アーサー・ミラーの闘い          | 6月13日号 |
| ⑨ エリア・カザンの転向と屈従        | 6月27日号 |
| ⑩ ダシール・ハメットの神秘的な生涯     | 7月4日号  |
| ⑪ ハメットの生涯を“私物化”した女     | 7月11日号 |
| ⑫ ヘルマンの隠された「転向」        | 7月18日号 |

アメリカ研究所をつくった芳賀さん 芳賀武追悼文集をつくる会

『追想・芳賀武』 1989年6月

“自由の国” もう一つの顔・著者訪問 『毎日新聞』(朝刊) 10月29日

## 1991年

私の新古典(田中克彦著『ことばと国家』) 『毎日新聞』(朝刊)

5月6日

古在先生の「片言双句」 『古在由重——二十世紀日本の抵抗者、

人・行動・思想』 同時代社 1991年7月

現代史のなかの「真実の瞬間」 『GUILTY BY SUSPICION

真実の瞬間』 (映画上映パンフレット) 1991年

American Studies in Japan, Oral History Series

- Vol. 1 清水 博先生に聞く  
2 高木八尺先生米寿記念会記録  
3 藤原守胤先生に聞く  
4 中屋健一先生に聞く  
5 西川正身先生に聞く  
6 (No 1, 2) 高木八尺先生に聞く  
7 斎藤 勇先生に聞く  
8 松井七郎先生に聞く  
9 松本重治先生に聞く  
10 上野直蔵先生に聞く  
11 鈴木圭介先生に聞く  
12 橋本福夫先生に聞く  
13 久保田きぬ子先生に聞く  
14 中野好夫先生に聞く  
15 楊井克巳先生に聞く  
16 鶴飼信成先生に聞く  
17 佳知晃子先生に聞く  
18 高野フミ先生に聞く  
19 今野源八郎先生に聞く  
20 斎藤 光先生に聞く  
21 大橋吉之輔先生・大橋健三郎先生に聞く  
22 大下尚一先生・オーティス・ケーリー先生・榊原  
胖夫先生・菅泰男先生・田口芳弘先生・岩山太  
次郎先生・釜田泰介先生・松山信直先生に聞く  
23 今津晃先生に聞く  
24 岩永健吉郎先生に聞く  
25 江口裕子先生に聞く  
26 佐伯彰一先生に聞く

陸井三郎先生に聞く

(American Studies in Japan, Oral History Series, Vol. 27)

平成4年3月10日発行

発行 東京大学アメリカ研究資料センター  
東京都目黒区駒場3丁目8-1 東京大学教養学部  
(03) 3467-1171 内線 235, 236

印刷 (有) 章英社  
東京都文京区本郷5丁目21-12  
(03) 3811-2346